

【論文】

中世武士本拠研究の成果・課題・展望
― 中世武士本拠論の構築をめざして ―

渡 邊 浩 貴

【論文】

中世武士本拠研究の成果・課題・展望

— 中世武士本拠論の構築をめざして —

渡邊浩貴

【キーワード】

中世武士本拠論 狭義の本拠 広義の本拠 本拠機能論
本拠神話

【要旨】

本稿では、戦前から現在に至る膨大な日本中世史学の武士・在地領主研究を武士本拠研究史として整理を試み、①開発、②流通・交流、③宗教・文化、の論点から成果と課題を振り返る。その上で、研究史のなかで武士本拠モデルの把握に重要な研究視角を与えてきた石井進や海津一朗、現時点の到達点である小野正敏・齋藤慎一の諸論とモデルを再検証し、既往の武士本拠研究が抱える課題を闡明化させた上で、筆者のこれまでの研究を踏まえ「本拠論」の射程を提示することを目的とする。

既往の本拠モデルは、単位所領内を対象とする本拠空間論と総括できる。ただし、武士・在地領主研究では広範な武士の諸活動が自明視されており、その活動は単位所領内に収まるものではない。本拠が本拠たり得るために、首都京都をはじめ権門都市群や地域社会への有機的回路の構築は必須であり、本拠に必須の社会的機能である。かかる立場から、従来の本拠空間論で措定された本拠を「狭義の本拠」とし、筆者の研究を踏まえながら如上の機能論的に把握される本拠を「広義の本拠」と定義した。この「広義の本拠」は①ネットワークモデル（単位所領を越えた本拠機能の図化）と②レイヤーモデル（立体的・動態的な本拠機能の図化）、さらに③機能を機能たらしめる言説としての「本拠神話」を持ち、この三要素によって「狭義の本拠」は最終的に存立する。こうした立場を「本拠機能論」とし、武士・在地領主研究への逆照射を試みた。

はじめに

戦前・戦後から現在に至る日本中世史学のなかで、武士・在地領主をめぐる研究が最も古典にして膨大にして学際的な領域分野であることに異論などなからう。そして武士・在地領主が地域社会のなかに領主支配の機能する場として設定し、政治・経済・文化・宗教などの諸活動の中心地に据えた「本拠」（「本拠」の定義については後述）は、武家屋敷・城館・城郭というミクロな建物群だけでなく、やがて城下町や近世城郭、藩庁・官公庁街を中核とする地方都市の形成といったマクロな空間へと成長も遂げていく¹⁾。時代の変化とともに本拠に対する人々の捉え方は様々で、地元武士の発生・発展と本拠拡大の歴史が、地元の発展史に重ね合わされて熱心に叙述あるいは政治利用された時代もあれば、観光のための文化資源として見直され、地域経済へ効果をもたらす存在として期待された時代もある。本拠は単なる歴史研究の対象のみならず、地域のアイデンティティを語る証言者でもあり、観光資源でもあり、それらは現代社会の諸課題と通じる重要な場でもあるのだ。地域には遺跡・伝承地を含め「○○氏館跡」「○○城跡」などといった武士の居住痕跡地とそれに付随する言説で溢れ、本拠はわれわれにとって最も身近な歴史体験の場にして歴史実践の場にもなり得る。

しかし、そうした多種多様な本拠のなかには、早々に歴史の表舞台から退場を余儀なくされたものもあれば、近世藩庁の所在地として現在も地方都市として生き残ったものもある。本拠の規模や特徴も時代や地域によって様々であるし、幾多の政争・動乱のなかでその消長は一見するとめまぐるしい。本拠はあまりにも「個性」的に過ぎよう。だが、その一つ一つの「個性」を抉剔し歴史的展開を追い、かかる地に立脚した武

士・在地領主の動向へと逆照射させて捉え直すならば、従来の武士・在地領主研究とは異なる知見を得られるのではないだろうか。すなわち、これまでの日本中世史学において主要な研究対象であり続けている武士・在地領主について、この「本拠」の性質・変遷を闡明にする分析視角から、あらためて彼らの歴史的存在を捉え直すことが可能になるものと考えるのである。本稿が中世武士の「本拠論」を標榜する理由はここにある。

本研究は、武士本拠が列島各地に創出され始める平安末・鎌倉初期から、動乱を経て本拠が選択・確定されていく南北朝内乱期（これらの本拠は室町・戦国期の城館へと繋がっていく）までの中世前期を主な対象とする。かかる時期の武士本拠研究は、本拠を直接的・間接的な対象としていたに関わらず、非常に豊富で多岐にわたる蓄積がある。それは、戦前の実証主義的研究から戦後の初期領主制論・新領主制論、社会史ブーム（分野横断型学際的研究の隆盛）、武士職能論（都の武士論）、地域社会論、在地領主論といった主要な武士・在地領主研究のみならず、荘園・村落史研究や生業論・環境史・災害史などでも関説されながら今日に至る。日本中世史学の歩みのなかで、本拠は戦前の実証主義的研究以来、領主開発の拠点的性格を見出されながら研究が本格的に着手され、戦後の新領主制論の登場を経て流通機能や都鄙間交渉といった社会的機能の分析が進む。また開発と同様に戦前から注目された本拠と宗教の関わりは、新領主制論で深められつつ文化史での学際的研究の進展の影響を受けながら現在もホットなテーマとして扱われ続けている。本拠をめぐるこれまでの研究史を概観するに、主な研究潮流として①開発、②流通・交流、③宗教・文化（これらの諸点の概要は後述）の三点に分けることができよう。しかし、こうした武士本拠にまつわる諸研究を整理し総括を行い、

本拠論として構築する試みはこれまで十分に行われず、齋藤慎一の諸論が現時点での到達点となっている²⁾。本論にて後ほど詳述する斎藤の本拠モデルは、一二世紀後半―一五世紀末までを事例に、本拠の特質を居館（城館）といった開発・交通や支配拠点のみに収斂させず、周辺の宗教施設なども含みながら地域の安穩を祈る場として再定義されたもので、以後武士本拠に関する様々な研究に大きな影響を与えている³⁾。その一方、武士本拠に関しては従来の考古学・歴史地理学のみならず、国文学・美術史学などの隣接諸学の参入も近年みられ、個人や研究グループ・機関を問わず様々な研究成果が生み出されてもいる。今一度、研究史の到達点を確認し、今後の重要課題を明らかにする作業は決して無駄ではなからう。

そこで本稿では、まず戦前から現在に至る武士本拠にまつわる諸研究を、先に示した①開発、②流通・交流、③宗教・文化、という三つの論点から整理して研究史の成果を振り返り、今後の課題を闡明にしたい⁴⁾。加えて、従来の研究で武士本拠を論じるにあたり、研究者ごとに「本拠」「本領」の用語が混在し、その概念も整理されなまま使用されている現状もある。これまで武士本拠研究に取り組んできた筆者の成果を踏まえつつ、筆者なりに「本拠」概念を提示する必要があるだろう。かかる概念規定を行った上で、本拠論としての研究視座を再構築し、その射程を最後に述べていきたい。「本拠」から武士・在地領主のいったい何が分かるのか。本稿および本研究はそうした課題に正面から取り組むものである。なお筆者自身の立場として、用語の混乱を避けるため、軍事貴族や地頭級領主の鎌倉御家人を指す場合は基本的に「武士」、彼らの本拠を「武士本拠」と呼称する。「在地領主」の用語は地域社会における彼ら「武士」の側面として便宜的に区別する。ただし先行研究整理にあたっては論者によ

つて用語の使用がまちまちであるため混用せざるを得ないことをあらかじめお断りしておく。

一 武士本拠研究の成果と課題①―開発をめぐる―

武士が本拠を創り上げ、維持するには様々な地域資源（水資源・山林資源など）の利活用に加え、頻発する災害への対応も要求される。本章では「開発」を、領主・地域住人の生産領域総体における資源利活用と捉え、近年の生業論・環境史・災害史も含めて総括する。

黎明期の本拠研究は戦前昭和期の実証主義的研究まで遡る。当初は領主開発の場として注目される一方、単位所領内のスタンダードアローン（孤立・個別的）な閉じた世界として叙述・把握される傾向が初期領主制論・新領主制論の時期まで続いた。一九三〇年代、今井林太郎や奥田真啓によって本拠は開発拠点と評価され、武士館・屋敷地の復原研究が試みられていた⁶。とりわけ奥田は、早くに武士館の宗教的性質を見出し、日常居館の「館」と戦時の「城郭」とを区別する指摘もしており注目される（この点は三章で後述）。こうした戦前から見出されてきた村落を基盤とする開発拠点としての本拠の性質は、一九六〇年代に豊田武へ継承・総括され、武士団の族的結合から用水統制や勸農・祭祀をテコに村落支配を達成する姿が描き出される⁷。折しも戦後日本中世史学を牽引した石母田正の領主制論（いわゆる「石母田領主制論」）が登場し在地領主制理論が活発に議論されていた時期、豊田武らの本拠研究は当初、戦後の在地領主制論の枠組みで取り組まれたものではなかった。しかし、村落を基盤とする武士本拠の様相と機能がまとまって提示されたことで、とくに用水統制・勸農の機能は後に東国の武士本拠研究に多大な影響を及ぼし、やがて在地領主制論と接点を持つようになる。他方、中世城館遺跡を戦

国期地域史研究へ定位したことで知られる村田修三は、居館の軍事機能に加え水利秩序に規定された一族結合の形態を見出しつつ、条里制地割をベースとする中世前期の氾濫原開発（低湿地開発）から長距離用水路開削による中世後期の耕地拡大という段階的開発過程を早くから指摘し、八〇・九〇年代の歴史地理学分野でさらに検討が深められていくこととなる⁸。

豊田の研究は、一九六〇年代後半～七〇年代に小山靖憲や峰岸純夫らの「堀ノ内体制論」に継承され発展していく⁹。「堀ノ内体制論」とは、武士居館を圍繞する「堀ノ内」という環濠が周辺村落の農業用水として機能した側面を高く評価し、水源地確保を通じた領主開発の村落に対する優位性を見出すもので、とくに東国社会で領主型村落として類型化されていく。中世前期の領主開発における「堀ノ内」の存在自体は、早くに現地調査の観点から疑問視されていた¹⁰。しかし、永原慶二の「小村散居型村落論」が示され、中世前期の領主開発が湧水・溜池を用いた谷戸開発が中心であると考えられていたなかで、「堀ノ内」を通じた用水統制・勸農にみられる東国武士の高度な開発技術力に注目が集まるようになり、八〇年代に谷戸開発↓低湿地（沖積低地）開発へと領主開発の特徴が見直されることに繋がる。

また初期領主制論への批判から六〇年代～七〇年代に登場した新領主制論では、領主支配を家父長的支配の拡大に求める戸田芳實・河音能平の「宅の論理」が登場し、人民支配を達成するための多角的な機能が次々と見出されるようになる¹¹。「宅の論理」では、領主の屋敷地的土地所有形態に規定された、領主屋敷・垣内Ⅱ本宅を媒介に下人・所従、在家農民が隷属していく構造を見出し、領主の「家」による包摂の動きを領主制発展として重視する。この「宅の論理」は後に石井進へ継承され、武士



図1 石井進の同心円モデル (一部改変) [石井 1987]

のイエ支配権をテコに「中心」武士の館・屋敷、「円A」領主直営地の田畠(佃・正作・御手作)で門田畠・「堀ノ内」に相当、「外円B」荘・郷・保・村などの地域単位、という同心円構造のモデルが構築され(【図1】石井進の同心円モデルを参照)、かつ中心・円A↓外円B全体への吸収を目指す運動性が示される⁽¹³⁾。さらに石井は、東国出身地頭領主(いわゆる「西遷御家人」)の開発能力の高さを景観復原作業を通じて明らかにし、イエ支配権拡大の原動力に武士たちの開発能力の高度性を据え、その基本性質を低湿地(沖積低地)開発とする⁽¹⁴⁾。ここに、「堀ノ内体制論」で培われた領主開発の水資源における優位性と、新領主制論で見出された領主の「家」(「石井のイエ支配権」)による運動性が石井進のモデルのもとで統合され、武士本拠における重要な空間モデルが登場するのである。以後、八〇年代〜九〇年代にかけて中世前期の武士・在地領主による低湿地(沖積低地)開発の事例は、海津一朗・吉田敏弘らによって次々と解明される⁽¹⁵⁾。

こうした武士本拠での開発研究は、隣接諸学の参入もあって八〇年代後半から九〇年代、二〇〇〇年代に見直しが迫られていく。まず小山・峰岸らの「堀ノ内体制論」について、考古学の橋口定志によって、領主居館を囲む土塁・堀の出現時期が十四世紀以降であり、史料上に登場する「堀ノ内」と別個のものとする一連の研究が出される⁽¹⁶⁾。「堀ノ内」＝領主居館と捉え、領主開発の優位性を説く従来の見解に修正が求められたのである。その一方、橋口の研究を端緒に、史料上の「堀ノ内」が武士の領主支配を表象する一種の「テリトリー」をあらわす領域概念として把握されるようになっていく⁽¹⁷⁾。水資源開発、とくに河川灌漑を中心に議論されてきた武士本拠の開発は、フィールドワークを用いた景観復原技法や歴史地理学の分野から、地形環境に規定された多様な水資源開発の様

相が明らかになっていく。服部英雄は遡及的景観復原技法を用いながら地名を歴史資料として研究資源化し、湧水・溜池・河川灌漑などの開発実態を明らかにする⁽¹⁸⁾。高島緑雄も近世文書・地籍図類を駆使しながら「谷田」の実態を分析し、中世開発のスタンダードとして再定位を行い⁽¹⁹⁾、原田信男は地形環境に即した村落類型の精緻化を試みている⁽²⁰⁾。地理学からは、金田章裕・高橋学・佐野静代らによって、微地形・微細微地形への注目による水資源開発の複雑性や水資源開発の発展段階が明示されるようになった⁽²¹⁾。

八〇年代〜九〇年代は本拠の開発研究が最も深化した時代である。その要因には、圃場整備等の開発事業による耕地景観・水利慣行の激変という危機的状況を受けた緊急調査（現況調査）が列島各地で行われたことがある。八〇年代になると荘園現地調査は、かつての部分的・補助的調査から時代・分野を限定しない悉皆調査を基本方針とする総合的景観復原研究へと転換し、自治体史編纂事業の活況化も相まって個人や有志の研究者集団、行政や大学研究機関で盛んに行われた⁽²²⁾。しかし、圃場整備が進展・完了して以降、棚田景観を残す地域が調査対象地に選ばれるだけで、次第に荘園現地調査は低調傾向を示すようになる。それと軌を一にして、本拠での水資源の利活用を中心とした開発研究も九〇年代を境に大きく下火となっていく、現在ではごく僅かな成果しか出されていない⁽²³⁾。九〇年代でなされた景観復原研究や地理学分野の成果に対し、圃場整備の影響を踏まえた遡及的景観復原の試みは僅少で、文献史学側から十分な応答ができていないのが現状であろう。

他方、本拠をめぐる多様な生業環境や災害も注目されるようになる。生業論・環境史の影響から白水智・高橋修・高木徳郎らによって、水資源だけにとどまらない山林資源の利活用や海辺・山間を舞台に活動する武

士・在地領主の姿が描かれる⁽²⁴⁾。本拠の資源利用に対する、地域の持つ規制力（環境的要因）が自覚され始めるのである。また落合義明は本拠が抱える災害リスクを議論の俎上に載せ、それへの対応の重要性を説く⁽²⁵⁾。これらの視座は近年の生業論・環境史・災害史の進展と関連するものであるが、まだまだ萌芽的研究段階でありさらに深化させていく必要がある。依然として圃場整備事業等による景観激変の影響は大きく、景観復原を踏まえた本拠の開発研究が現在も低調傾向にあり続けていることに変わりはない⁽²⁶⁾。

二 武士本拠研究の成果と課題②―流通・交流をめぐる―

開発を主体とする研究が新領主制論の時期まで単位所領内のスタンダードアロンの本拠空間を描いてきた一方、本拠における流通との関わりが注目され、九〇年代の地域社会論の登場を経ると、武士の諸活動は広範なステージのなかで把握されるようになる。本章では、本拠をめぐる流通（交通・経済）に加え、交流の観点で都鄙間交渉や近年注目が集まる戦争論・紛争論の成果も合わせて振り返ってみる⁽²⁷⁾。

本拠と流通の関わりは当初、石母田正が「在地の領主はその発展によって都市的領主を生み出す」と述べたように⁽²⁸⁾、発展段階の結果として獲得されるものと理解されていた。その後、新領主制論の時期になると、在地領主自体が勸農機能から流通機能の掌握へと段階的に機能変化する過程を見出した河合正治・工藤敬一・佐藤和彦や、在地領主による流通経済の掌握を領主制的支配成立の前提条件とする三浦圭一・戸田芳實らの相違はあったものの⁽²⁹⁾、現在では武士・在地領主の基本機能として流通機構へのコミットメントが理解されている。八〇年代に都鄙間交渉の視点が斉藤利男によって導入されると、本拠における流通や都鄙間交渉もク

ローズアップされ始める³¹。海津一郎は開発をベースとした石井進の同心円モデル(「図1」)に市・宿などを加え、流通機構の掌握を通じた本拠モデルを提示している³²。ここに、本拠存立の基本機能として流通が組み込まれる。あわせて、佐藤和彦によって悪党(在地領主)と流通との関わりが見出された悪党研究では、八〇・九〇年代以降になると莊園という既存領域を越えて流通機構に関わる在地領主像を構築し、遠隔地の流通拠点に族縁的ネットワークを張り巡らせ、「職」のみでは把握しきれない莊園公領内の流通機構を掌握していた様相を明らかにしている³³。一連の悪党研究の成果は、九〇年代以降に進む地域社会で在地領主を捉える研究動向の前提となる。

九〇年代は本拠研究の分析視角において大きな分水嶺といえよう。以下、三つの視点から九〇年代の本拠研究を整理する。まず一つは、地域社会論の登場とリンクしながら、単位所領を越えた「地域社会」という広いステージのなかに本拠を位置づけようとする視座が生まれだした点である。三浦圭一・戸田芳實の分析視角を継承した高橋修は、武士・在地領主による単位所領を越えた地域社会全体での支配原理を説明する必要性を提起し、「町場」の管理などを通じた分業・流通関係を介した領主支配がやがて地域社会へと広がっていく過程を解明する³⁴。かつて開発研究のなかで、単位所領内というややスタンドアローン(孤立・個別的)で内向きな様子が語られた武士本拠は、高橋の研究の登場によって、地域社会という広いステージで議論されだすようになっていく。その後、本拠と広域な流通体系との関わりは、網野善彦が提起した中世都市論の影響も受けつつ、中世考古学による港湾・宿・市場など多種多様な流通・交通拠点(Ⅱ「都市的な場」)の発見と諸成果を受けながら岡陽一郎や落合義明らによって継承されていく³⁵。

もう一つは、戦争論の視点である。すでに居館に軍事機能を見出した村田修三の研究が登場していたが、その後、藤木久志・川合康によって戦争を契機とする秩序形成(Ⅱ平和)が注目され始め、小林一岳は鎌倉末期〜室町期における領主一揆を「当知行保全システム」と概念化し、一族や近隣領主との結合による本拠維持の様態を明らかにしている³⁶。本拠の形成・維持において、秩序形成という側面からあらためて戦争の意義が論じられるようになるのだが、以後の進展はみられていない。それでも、山野用益権をめぐる紛争と秩序形成の議論は莊園・村落史研究や西洋中世史研究で盛んになされており、近年の紛争論と本拠研究の接続も望まれる。戦争論のなかで、地域的な流通体系も包摂して軍事的な主導権を発揮可能とした勢力圏を戦時における「軍事的テリトリー」とみる川合康の見解も登場しているものの、その後の研究は深められていない³⁷。戦争論・紛争論を踏まえた本拠研究の進展は依然課題として残る。

最後の一つに、高橋昌明の武士職能論や元木泰雄の京武者論の登場という、いわゆる「都の武士論」があげられる³⁸。これらの研究によって旧来の武士成立史に抜本的な見直しがされ、王権・王統や首都京都との関わりを不可欠の条件とする武士の姿が知られるようになる。「都の武士論」を、武士本拠を含む列島規模での武士の諸活動に敷衍させて論じたのが野口実の「一所傍輩」のネットワークや川合康の「京武者社会」の諸概念である³⁹。とくに野口は王権・王統守護のための在京活動や首都京都の都市機能に依拠しながら地域活動を展開する武士像を総体的に描き出し、その後、武士の在京活動が次々と解明されだす⁴⁰。野口の研究を端緒に、武士本拠の形成・維持・発展に果たす首都京都の影響に注目が集まることとなる。

列島規模での武士・在地領主の諸活動が明らかになると、二〇〇〇年代

では、都鄙間・地域間にまたがる一族分業や経済活動の様相、都市領主としての活動にも検討が及ぶ。服部英雄は多様な職能民を含む組織体として武士団を捉え、田中大喜・清水亮は本拠経営と連動した経済活動や武士団ネットワークの広がり論じる。井上聡・湯浅治久は本拠と地域経済拠点との関係にとどまらず、鎌倉を含む列島規模で展開する経済活動（湯浅は「御家人経済圏」と呼称する）の様相も明らかにしている。都市領主研究では、高橋慎一郎・秋山哲雄によって京都・鎌倉での武家地や寺院造営の実態が検討され、とくに秋山は武家の首都鎌倉を中軸に武士たちが本拠との間を移動する姿を叙述し、武士の移動性を重視する。武士本拠の形成・維持・発展において、地域流通・経済拠点や首都京都・鎌倉との関わりは、以後不可欠の要素として議論されるようになる。野口実の研究を踏まえつつ、山本隆志は本拠形成史の過程に在京活動の意義を位置づける。これら一連の研究を受け、京都・鎌倉・地域（本拠）でネットワークを構築しながら本拠形成を果たす武士の活動は、現在では共通認識となつていよう。

こうした九〇年代以降の一連の成果は、在地領主制論に代替する概念として提起された在地領主論のなかに積極的に組み込まれていく。在地領主論は、在地領主が具有する多角的な社会的機能や幕府・荘園領主など上部権力との関係を追求する視角で、在地領主論の提起以後に歴史理論の不在性や、「在地領主」概念自体の見直しが指摘されるも、各機能の実証研究が継続されているのが現状であろう。とくに本拠の流通をめぐる研究では、「町場」の持つ性質へと議論が展開している。高橋修は早くから武士による「町場」などの流通機構掌握が不徹底であったことを見出していたが、田中大喜はかかる地を領主間の共生・競争が発現する場として捉え直す。武士・在地領主による流通拠点へのコミットは研

究史上周知の事実であるが、ようやくコミットの内実が検討され始めたのである。

武士・在地領主が機能論として把握されるようになると、これまでそれぞれ孤立的・個別的に検討されてきた本拠の諸機能にまつわる研究に変化が生じる。最近、高橋修は武士本拠において流通（町場の興行）と宗教（熊野参詣道）の相関関係を見出しており、本拠の機能複合に焦点が当てられ始めている。本拠が具有する諸機能の別出（とくに本拠をめぐる流通・交流の研究で顕著だった）段階から、次第に本拠のもとでこれら諸機能がいかなる有機的結合を伴いながら布置されていくのか、という課題が闡明化してきたと評価できよう。そのためには、本拠の多角的な社会的機能を包括して総体的に論じる必要がある。本拠論の構築が待望される所以である。

三 武士本拠研究の成果と課題③—宗教・文化をめぐって—

本拠の宗教・文化は、文献史学において武士・在地領主の氏寺・氏社での寺社経営を中心に進められ豊富な研究蓄積を持つ。とりわけ後述する齋藤慎一が提示した本拠モデルは当該分野での大きな成果である。また「都の武士論」が登場して以降は首都京都との人的ネットワークを介した文化伝播も盛んに論じられ、折からの社会史ブームと相まって、武士本拠でも「文化」（ここでは象徴形態のなかで表現・継承されてきた思考様式体系も含む）が学際的に検討されたが、ブームの陰りとともに次第に下火となつていった。それでも考古学・美術史学・国文学・民俗学など隣接諸学からの言及が最も多い分野であることに変わりはない。本章ではこれら隣接諸学の諸成果と併せて瞥見していこう。

戦前以来、本拠は氏寺・氏社という寺社経営やその機能、挙行される

法会・祭礼といったソフト面（ソフト面は本稿において交流・物流などの人・モノ・情報の繋がりや移動、儀礼・芸能等を含意する。なお従来論じられたイデオロギー支配の研究も便宜上ソフト面に含めているが、後述するように「神話」はソフト面に含めることはしない）を中心としながら武士・在地領主と宗教との関わりが議論されてきた。戦前の実証主義的研究では、奥田真啓が早くから武士団結合に果たす氏神・氏寺の意義に注目し、所領経営や僧職統制・宗教儀礼などの基礎的事実を明らかにする⁽⁶⁵⁾。戦後の新領主制論でも在地領主が具有する宗教的機能（イデオロギー支配）が分析され、黒田俊雄・河合正治・河音能平らの成果が登場し⁽⁶⁶⁾、石井進は一宮祭祀での役負担が地域の武士たちの身分認定の場であるとして武士発生史のなかで諸国二宮の意義を位置づける⁽⁶⁷⁾。その後、地域社会論の登場と軌を一にして、武士・在地領主による荘園鎮守への関与や氏寺の荘祈願寺化などが、地域社会における公共的機能として評価されるようになっていく。湯浅治久は、中世後期の事例として在地領主が地域祭祀の負担を通じて地域社会から「公方」（＝地域公権力）と呼称され、地域権力として承認されていく過程を明らかにし⁽⁶⁸⁾、氏寺・氏社の持つ多様な社会的機能が注目され始める。南北朝内乱期などの地域紛争が拡大再生産される状況下、寄進を通じて在地領主の所領保全機能を担った点はこれまで知られていたが⁽⁶⁹⁾、苜米一志は在地領主の氏寺・氏社が民衆の宗教的要求に応える装置として機能したことを評価し、これらを中核に新たな宗教的秩序が形成されていく過程を捉える⁽⁷⁰⁾。

とくに齋藤慎一は、氏寺・氏社を含む本拠内の多様な宗教施設が地域の安穩を体现する機能を有したことを評価し（この点はさらに後述する）、中世の貴顕・民衆が希求した安穩や平和を実現する存在として武士本拠を再定義する⁽⁷¹⁾。齋藤の研究は法会・祭礼などのソフト面を扱ったも

のではないが、以後本拠における領主支配の正当性を示す行為として、かかる安穩や平和を目的とした宗教儀礼の意義が公共機能の問題と関わりながらクローズアップされだす起点となった。山本隆志は東国武士が主催する社寺での法会・祭礼が地域秩序の維持機能を持ち、氏寺に武士一族以外の諸階層が帰依して公共性を獲得していく過程を描く⁽⁷²⁾。高橋修は町場を開いて本拠形成を果たした武士・在地領主が宗教者との結縁を紐帯としながら宗教秩序を通じてより広域な領主支配を達成し、かつ先述したように流通（町場の興行）と宗教（熊野参詣道）が本拠のもとで複合的に機能した点を明らかにしている⁽⁷³⁾。田中大喜も中世前期から後期にかけて氏寺が法会を通じて平和創出を担い安穩機能を具有していく過程を指摘する⁽⁷⁴⁾。

その一方で、社会史ブームの影響・余燼や考古学研究の蓄積という後押しもあって、氏寺・氏社だけに収斂しないハード面（ハード面は本稿において後述する居館・社寺などのほかに港湾・宿市といった構造物や水利灌漑といった用水体系や山林資源をも含意する）として本拠の宗教的・文化的機能や装置（居館・御堂・苑池（浄土庭園）・経塚など）への検討が進む。中野豊任は文献・考古・民俗・芸能などの多様な歴史資料の博搜によって、納骨や板碑造立を通じて西方極楽浄土が観念され地域霊場が形成される過程を明らかにしており、先駆的研究と言えよう⁽⁷⁵⁾。市村高男は中世前期の城郭が社寺などの宗教施設を圍繞して形成された点を受け、城郭＝聖域・聖地とする視座を早くから打ち出す⁽⁷⁶⁾。この視点は、飯村均・中澤克昭によって中世前期の城郭と聖域・聖地との相関関係が深められる⁽⁷⁷⁾。また五味文彦は武士の館空間とその内部で催される文化事業に着目し、館の文化的機能を指摘する⁽⁷⁸⁾。

これら一連の研究を経て、考古学の小野正敏や文献史学の齋藤慎一よ

り本拠の館・御堂・城の機能や空間モデルに関する重要な研究が登場する。まず小野は、武士の館と御堂を併せて「御堂は来世、未来の象徴、御館は現世の権威の象徴、氏神社や祖先の墓塔は過去の権威の象徴」「東国では、来世の象徴には都ぶりを選択したが、現世の権威の象徴となる館には、むしろ積極的に東国在来の権威表徴として四面庇の主屋と長大な侍所、厩からなる建物構成を選択した」点を指摘し、権威表象としての館・御堂のみならず文化受容の様態にまで検討が及ぶ。館に付属した苑池（浄土庭園）の存在が発掘調査で明らかになると、本拠の館が寺院や苑池（浄土庭園）など宗教的施設とセットになって成立したことがよく知られていく。⁸⁰⁾

氏寺・氏社に加え、既存の聖地を取り込みながら安穩機能を体现した本拠の性質を明らかとしたのが、齋藤慎一の武士本拠モデルである（図2）。齋藤は、居館・城郭・寺社・聖地・交通路・用水などの景観配置を提示し、それら社会的諸機能が本拠に蝟集され、民衆の安穩や平和を体现するものと評価する。⁸¹⁾ 本拠内にある来世や極楽往生を体现する聖地を京都モデルの伝播の一環と捉え、それ以外の現世利益を追求する聖地を既存の地域信仰（水源・巨石・遺跡など）の摂取とみる齋藤の指摘によって、先の小野正敏と併せ、城館を含む武士本拠の宗教秩序・権威表象が外来・在来の多様な文化的要素から構成されていることが知られるようになった。ハード面から本拠モデルを構築した齋藤の研究は、①本拠の持つ宗教的機能を明確に位置づけた点、②従来の現地調査では困難を伴っていた中世前期武士本拠の屋敷地について、景観を手掛かりに現地比定を可能とする方法論を提示した点、③中世前期の居館から中世後期の城館や城下町形成までをも一貫して見通すための理論的枠組みを構築した点、で重要な意義を持つ。多くの武士本拠を取り上げる研究で齋

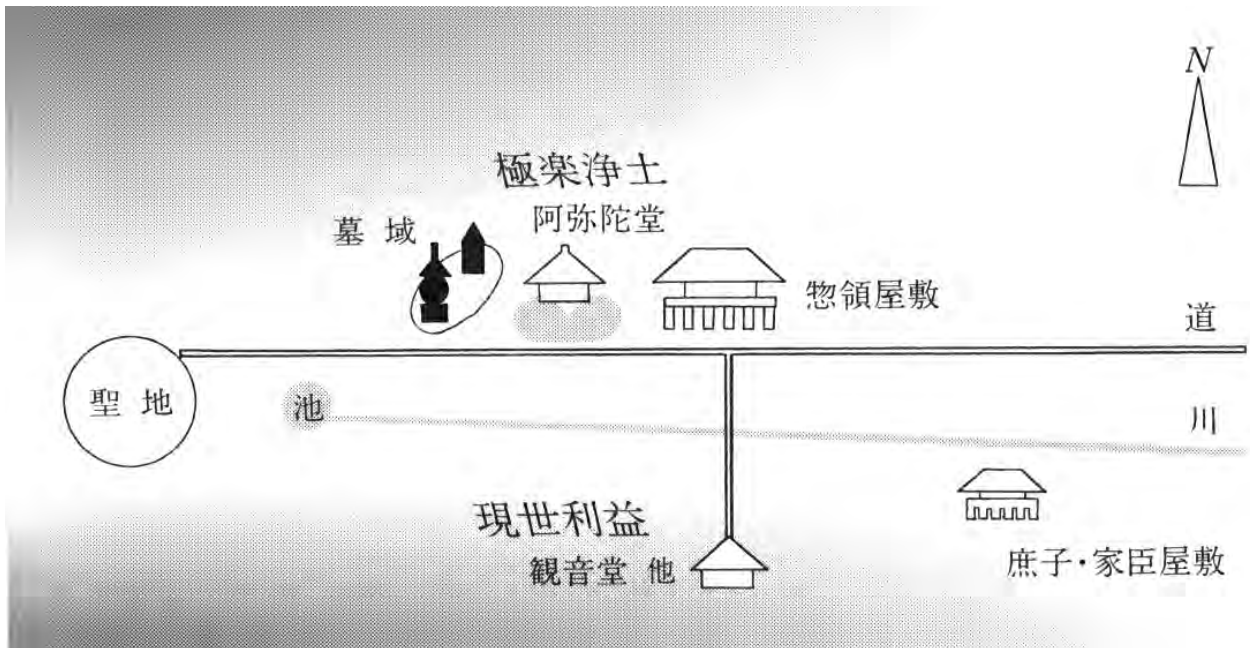


図2 齋藤慎一の武士本拠モデル [齋藤 2006]

藤の本拠モデルが大方の支持を受けているのが現在の状況であろう。⁽⁸³⁾ 本拠の宗教・文化的機能をめぐる研究の到達点である。

小野・齋藤が示した本拠をめぐる宗教秩序・権威表象の様相はいくつかの課題を孕むが、その点の具体的検討は五章に譲ることとし、ここでは齋藤の「武士の本拠モデルの背景には京都で培われた都市計画の論理が影響を与えていたことになる。つまり京都で生まれた論理が平泉や鎌倉、衣笠など各地の武家の本拠にまで影響していたのである」と述べる点を取り上げたい。⁽⁸⁴⁾ 齋藤の本拠モデルの前提に、「地域側による京都モデルの受容があることには注意を払う必要がある。例えば考古学では、すでに小野正敏が中央（京都）と地方における文化の受容・非受容において受容する地域権力側の主体性に基づいた取捨選択があったことを喝破⁽⁸⁵⁾し、京都文化を地域社会側がどのような意図・論理に基づいて受容したのかという視点で研究が深められている。⁽⁸⁶⁾ 右の成果からみるに、齋藤の本拠モデルは、ややもすると京都モデルの単線的かつ一方通行的な文化伝播という議論に陥っていないだろうか。

同様の課題は、本拠をとりまく文化史研究、とくに文化受容・伝播の分野でも指摘することができる。戦後以来、かかる分野は決して本拠研究のなかでメジャーたり得てなかったが、考古学・国文学・美術史学・民俗学などにより鎌倉幕府や都市鎌倉、地域社会での京都文化伝播の実態が知られはじめると、武士やその本拠での文化活動にも検討が及ぶようになる。以下個別事例にも言及しながら俯瞰してみよう。

まず国文学の歌謡研究では鎌倉での早歌の形成・受容を総合的に論じた外村久江の研究が挙げられる。⁽⁸⁷⁾ とくに外村は比企一族末裔で早歌作者として著名な比企助員の活動を取り上げ、北条氏権力への接近による被官化や旧領武蔵国比企郡での活動も指摘し、文化活動が本拠の回復・維

持と相関関係にある点を早くから示唆している。また下野国宇都宮氏の活発な在京活動を経て頼綱や笠間時朝による宇都宮歌壇形成へと結実する過程が、小林一彦によつて明らかにされている。⁽⁸⁸⁾ その後、小川剛生によつて宗尊親王期に成立する鎌倉歌壇の様相や人的構成が判明し、中世後期東国での城館で催される和歌会の存在も知られるようになる。⁽⁸⁹⁾

美術史学の仏像研究では、武士本拠での政治的動向と造像を連動させたものとして、肥後国球磨郡をフィールドに相良一族らの事例を扱った有木芳隆の研究がある。⁽⁹¹⁾ その他、鎌倉幕府の造像について塩澤寛樹が鎌倉政治史と連動させながら造像事業を位置づける成果があるものの、⁽⁹²⁾ 仏像研究の大半は仏像をモノ資料としてのみ捉え様式論に終始し、長岡龍作が追求した社寺や地域社会の場で造像が果たす社会的機能や社会集団との関わりという論点は薄弱のままである。⁽⁹³⁾ 文献史学の高橋修によつて、常陸国笠間時朝の造像事業の果たす本拠維持機能を剔出した点がほぼ唯一の成果であろう。⁽⁹⁴⁾ 一方で、列島各地では日々仏像調査が実施され仏像の銘文・制作年代の諸成果が膨大に積み重ねられている。武士本拠のなかに仏像を位置づける作業は今後の大きな課題である。

音楽・芸能研究は文献史学・国文学・民俗学からすでに多くの言及がある。なかでも武蔵国豊島氏の支配領域と王子田楽との相関を説いた西岡芳文の指摘は、⁽⁹⁵⁾ 本拠や領主空間での芸能を論じた先駆的研究と言えよう。⁽⁹⁶⁾ 舞楽の地方伝播は山路興造・井原今朝男が先鞭を付け、⁽⁹⁷⁾ 荻美津夫・中本真人・磯水絵は鎌倉幕府の音楽制度成立を、⁽⁹⁸⁾ 豊永聡美や筆者は武士の音楽教習や京都楽人・舞人の鎌倉下向状況を明らかにした。⁽⁹⁹⁾ さらに筆者は鎌倉が京都との文化交流を経て東国の音楽拠点へと成長すると、鎌倉を中心に東国武士本拠へ音楽文化が伝播する様相も見通した。⁽¹⁰⁰⁾

ただし、歌謡や仏像・音楽・芸能をめぐる研究は、先述したように、や

やもすると京都↓鎌倉・地方という単線的かつ一方通行的文化伝播の様相しか叙述できておらず、地域間の文化交流・伝播などの複線的性質や受容側の態度や価値体系の存在に検討が及んでいなかった。その一方で考古学からは、武士居館や寺院の遺構・遺物を通じて京都文化の流入や高度な宗教文化の具像が描き出されつつ、受容側の姿勢にも注目が集まる。貿易陶磁や京都系かわらけと呼ばれる「手づくねかわらけ」の出土状況から平泉藤原氏・武蔵国河越氏・伊豆国北条氏ら本拠での膨大な物流や京都との強い繋がりが知られ、受容する武士側の取捨選択や価値体系も明らかにされている。また本拠の寺院を構成する多種多様なモノ資料についても考古学・文献史学などで分析が進み、経塚の造営、板碑の流通、永福寺式軒瓦の分布、巨木柏楨の植樹状況も明らかにされ、東国独自の地域間文化交流や伝播の様相も次第に分かるようになってきた。残念ながらこれらを包括的に議論する研究段階にはいまだ至っておらず、研究の細分化・蛸壺化が進展している。

武士・在地領主の一族や本拠には多くの僧侶が都鄙間を往来し文化活動を展開していたことは早くから知られ、とくに平雅行は京都権門寺院へ入った有力御家人出身子弟の履歴を追い、武士・在地領主による在京活動の実態解明に大きな影響を与える。「都の武士論」の流れに属す野口実は、京都政界へ繋がる姻戚関係や在京活動（王権・王統守護、一族出身僧侶の動向から武士一族や本拠での京都文化受容を総合的に論じ、以後、京都政界との多様な繋がりが東国武士・在地領主本拠での高度な文化受容・形成が議論されるようになっていく。さらに野口は、いわゆる西遷御家人の本拠移転先についても京都文化導入の様相を指摘しており、武士たちの列島規模で展開される広範な活動に文化交流の観点を明確に位置つけた点で先駆的研究と言えよう。

だが野口実の一連の諸論は、齋藤慎一の本拠モデル同様に京都↓鎌倉・地方という単線的・一方通行的な文化伝播の形態しか描けておらず、考古学が培ってきた受容する側の武士へのまなざしを欠いている。また武士の本拠形成と文化伝播の相関をみる場合に、領主権力反映論という単純な図式に陥っていないか、あらためて検討する必要がある。鎌倉での文化形成も京都↓鎌倉のみの関係に完結しないことは音楽受容や仏像制作の観点でこれまで筆者が明らかにしてきたが、今後はより一層、受容する武士・在地領主の動向や地域社会での文化環境とその規定性、地域間の文化交流に注視し、ソフト面・ハード面の両側面から総合的に議論する必要がある。

四 中世武士本拠論の射程

戦前・戦後から現在に至る日本中世史学のなかで、中世前期武士・在地領主の本拠に関わる諸研究を本拠研究史として新たに整理した上で、個別分野の課題点に触れながら縷述してきた。本章では本拠研究史の重要課題を検討し、本稿が掲げる「本拠論」の射程について述べていこう。

(一) 本拠空間論の限界

中世前期の武士本拠は、高度な領主開発とイエ支配権に基づく単位所領への領域支配拡大の運動性を基軸とする石井進の同心円モデル、さらに宿・市などの流通機構を組み込んだ海津一朗のモデル、宗教機能を加えた本拠を構成する諸要素の景観配置を総合的に提示した齋藤慎一の本拠モデルがこれまで登場している。奇しくも戦後歴史学の武士・在地領主研究が、開発↓流通↓宗教の社会的機能へと段階的に注目されてきた研究動向と軌を一とした変遷をたどってきた。ただし、これら研究はす

べて本拠を空間的に把握したモデルであることには留意が必要である。館・屋敷を中核とした同心円構造は、中世後期でも小野正敏が越前国一乗谷の城下町を同心円構造のモデルとして把握しており、⁽¹⁶⁾ 広く一般的な把握方法と言えよう。しかし、石井進の荘・郷・保・村を外縁とするモデルでは、あくまでも単位所領内部での領主支配の伸長過程しか描き出せていないという限界を孕む。それは齋藤慎一の本拠モデルも同様で、笠城・薬王寺遺跡・古久里浜湾を含む相模国三浦氏や浅見山丘陵の大久保山遺跡に立脚した武蔵国庄氏、横地城・藤谷神社を含む遠江国横地氏の事例では浅く広い谷戸内部で完結する領主世界が描かれる。勿論、齋藤の諸論では京都モデルの受容を指摘しており、必ずしも新領主制論までの本拠研究に共通した内向きの閉じた(スタンドアロンな)世界ばかりではなかった。それでも、武士の領域認識であり、かつて「於件屋敷堀内者、前々検島之時、全以不被向馬之鼻⁽¹⁷⁾」や「重代相伝の堀の内、必ず敵に蹴らるべし⁽¹⁸⁾」とも表現された外部勢力の容喙し得ない「堀ノ内」の規模に近い、谷戸などの地形環境に規定された局限化された拠点ということになる。本稿ではこれら本拠モデルの諸研究を「本拠空間論」と捉えておきたい。

さて、新領主制論・地域社会論・武士職能論・在地領主論を経て武士・在地領主の多角的な社会的機能が分析された結果、首都京都などとの都鄙間ネットワークや単位所領を越えた地域社会の流通に関わりながら領主支配を展開した姿が共通認識となっている。加えて、武士・在地領主が地域社会への公共性を獲得する過程で、氏寺・氏社のみならず一宮や荘園鎮守・荘祈願寺への関与を果たす動向も知られている。本拠が本拠たり得るための存立条件に、こうした単位所領を越えた流通・宗教拠点との関わりが不可欠であることは既知となつていよう。あわせて八〇・九

〇年代以降の悪党研究によつて、荘園領域を超越して遠隔地流通拠点に族縁的ネットワークを張り巡らせる武士の姿が明らかとなつている現在、個々の単位所領を維持(年貢輸送の実現も含む)するためにより広範囲かつ地域の核となる重要な流通拠点に関わらざるを得ないことはもはや自明である。

最後に、本拠空間論が図示してきた平面的解釈も、もう一步進められた理解が必要であろう。本稿では本拠研究史を①開発、②流通・交流、③宗教・文化の観点で整理してきたが、それぞれの諸機能に依じて本拠の持つ広がりや性質は当然ながら異なる。かかる機能の位相を踏まえずに平面的空間構成を論じて、武士本拠毎の差異や格差、本拠を基盤とする武士たちの親族構造や族縁ネットワークの諸相に接続させて総体的に把握することは困難であろう。

(2) 「本拠機能論」としての本拠論

如上の研究史的到達点と本拠空間論の持つ課題点を把握した上で、あらためて武士の「本拠」を再定義する必要がある。ここからは筆者がこれまで扱ってきた個別事例を踏まえながら検討を加えてみたい。私見によれば、本拠には「狭義の本拠」と「広義の本拠」の二つがある。

【1】狭義の本拠

相模国山内首藤氏は備後国恵蘇郡地毗荘(本郷・河北・伊与(伊与西)・伊与東(森脇)・多賀の郷・村から構成)のうち、本郷(さらに本郷・上原・下原の村から構成)の地頭職を得て鎌倉末期頃から本拠形成を果たしていく。⁽¹⁹⁾ ただし、山内首藤氏自身は、地毗荘全体を「備後国治美荘事、為山内一族等本領之処、三吉式部大夫入道打入当所及合戦云々」(応安七

年(一三七四)八月三日「室町幕府御教書案」(傍線筆者)と、近隣領主三吉氏による押領行為を室町幕府へ訴える際に「本領」と称す。冒頭で述べたように、本拠をめぐって研究者毎に様々な用語が使用されるが、史料用語としては確かに武士の中核となる単位所領が重代の「本領」と呼称される事例が散見される。「本領」は鎌倉幕府の法制用語のなかで「一、本領トハ、為開発領主、賜代々武家御下文所領田畠等事也、(又私領トモ云)」（『沙汰未練書』⁽¹⁰⁾、へ）は割註」と定められるが、先の山内首藤氏の事例などを勘案するに政治領域としての性格が強く、単位所領を包摂して(山内首藤氏の「地毗莊」など)用いられる場合が多い。そうなれば、本拠を本拠たらしめる存立条件や諸機能を問うてきた本稿の趣旨に照らすに、史料用語の「本領」では十分な説明を加えることが困難であろう。なぜなら、本拠は単位所領を越えた機能によって支えられるからである。それゆえ筆者は、武士本拠を論じる際に「本領」という用語を基本的に使用しない。

鎌倉末期から南北朝内乱期にかけて山内首藤氏惣領家は、地毗莊本郷のうち居館や氏寺観音寺(後に円通寺)・丑寅神社、鑄物師生産拠点や市町・交通路、山林資源、別所池―大野池(親池・子池の關係)の水資源灌漑体系をすべて「高山門田」という領域に包摂し、氏寺観音寺へ寄進して所領保全を図り惣領家一族で相続していく。⁽¹¹⁾「高山門田」の「門田」とは佃・御正作と同様に領主直営田を指すが、堀ノ内の如く耕作地を包摂した領域呼称として使用され、他勢力の容喙し得ない惣領家の最重要拠点という位置づけになっている。

斎藤慎一が示す本拠モデルと同様に、本拠空間論での本拠とは、人・モノ・情報などが行き交い集約・拡散する場としての「拠点」の集合体ということになる。領主一族が居住する館・屋敷に加え、持仏堂・氏寺・氏

社や聖地といった宗教拠点、市場・町などの流通拠点が本拠のなかに包摂され、蝟集される。領主居館や開発・流通・宗教的機能が蝟集された「高山門田」こそ、山内首藤氏惣領家の最重要拠点であり、これまでの本拠空間論(とくに斎藤の本拠モデル)で定義されるところの本拠になる。かかる事例を踏まえ、本拠空間論が論じてきた本拠を本論では「狭義の本拠」と呼びたい。

【2】広義の本拠

しかし、本拠を本拠たらしめるにはより単位所領を越えた遠隔かつ広域なネットワークが必要になる。例えば、山内首藤氏と姻戚関係にある近隣領主の得宗被官広沢氏(武蔵国新座郡広沢郷出身)は鎌倉初期から備後国三谷郡一帯を拠点化し、郡内に江田・和智・田利・光清・仁賀・湯谷ら庶子を分出していく。⁽¹²⁾三谷郡西条内の平松城や善逝寺などは広沢一族の「狭義の本拠」と呼べる領主空間である。だが、備北の中山間地域を基盤とする広沢一族の単位所領を越えた遠隔・広域な活動実態は、南北朝内乱期の悪党事件で顕在化する。同氏は瀬戸内海流通の要衝尾道・因嶋や日本海側へ縦断する石見路周辺の高野山領大田荘・八坂社領小童保などでの悪党事件に関与し広域な地域ネットワークが知られる。広沢氏の三谷西条は北朝方によって敵方闘所地化されるも、広沢氏が仕掛ける広範な地域紛争は終熄せず、ついには上級権力の追認を受け地域勢力は温存されたまま室町期地域社会へ継承される。上級権力を以てしても広沢氏の地域基盤を瓦解させることはできなかったのだ。

広沢氏の「狭義の本拠」はまさに如上の単位所領を越えた遠隔地ネットワークや流通拠点の存在によって支えられていたのである。こうした、「狭義の本拠」を包摂して地域社会の町場や港湾といった拠点へコミッ

ト、さらには首都京都や鎌倉などの権門都市や権門勢力との回路を構築することも在京・在鎌倉活動をテコに本拠形成・維持・発展を図る武士の事例にとつて不可欠の要素である(実際、広沢氏は得宗被官であり在鎌倉活動や高度な文化的素養を持っていたことも知られる。その他、二階堂氏・伊賀氏など吏僚系御家人の本拠形成・維持・発展の事例でも在京・在鎌倉活動が果たした意味は大きい)。本拠形成・維持・発展を試みるために存在する、首都京都を頂点とする権門都市群、列島規模で展開する遠隔地所領、そして地域社会の流通拠点などの人やモノ・情報を介した繋がりや連鎖による有機的ネットワークの総体を、本稿では「広義の本拠」と呼ぶ⁽⁸⁾。勿論、地域社会の市場・町場・港湾では、特定の領主による排他的な支配が樹立された訳ではなく、無縁の性格もあれば、共生・競合の場という側面もある⁽⁹⁾。多様な地域勢力が寄り集まる場へコミット(当然ながら個々の武士で濃淡・グラデーションが存在しよう)することこそ、本拠の成立・維持・発展に不可欠な要件なのである。

同様に、例えば石見国長野荘豊田郷横田村の地頭職を獲得した内田氏(遠江国内田荘出身)は、高津川流域の河岸段丘面に「堀内」を設定し、付近に豊田城や豊田神社・長寅寺・石塔寺権現社を配し、段丘下に横田市を持つ⁽¹⁰⁾。これも「狭義の本拠」の範疇に属するが、さらに内田氏は高津川交通の要衝で「河関」「関口」も設定された飯田・虫追に権益を持つ。当該地には近隣の国御家人虫追氏や安富氏、益田氏も様々な権益を通じてコミットし町場の様相を呈していた。だが、内田氏庶流で中山間部に地頭職を得た俣賀氏は、かかる町場へのコミットは見えず、高津川に面した「須子村内田屋敷」を置いて河川交通に関わろうとしている。在来の国御家人・外来の西遷御家人の別なく、高津川河川交通への介在なくして本拠形成・維持など行えなかったのである。こうした「狭義の本拠」

と町場との繋がりも「広義の本拠」に含まれる。

宗教についても、「狭義の本拠」内にある社寺が一宮や地域の霊場・聖地と関わる事例が見出せる。山内首藤氏の「高山門田」内に置かれた丑寅神社では同氏が神主任免権を持ち⁽¹¹⁾、十四世紀になると備後国一宮吉備津神社の宮座(一國規模で「島の町・国の町」と称された⁽¹²⁾)の十二座席に「九うしとら」が有力神主として登場し⁽¹³⁾、諸国一宮が形成する宗教的ネットワークのなかに「高山門田」内の丑寅神社も組み込まれていく。その他、相模国三浦氏は同国三浦郡矢部郷のうち、衣笠城を中心とした谷戸一帯は「狭義の本拠」として把握できるが⁽¹⁴⁾、宗教儀礼においては三浦半島南端の三崎荘およびその海上において盛大な迎講を実施し、そこには庶流佐原氏らも加わり、惣領家による内外への文化力誇示と本拠の荘厳化を果たしている⁽¹⁵⁾。迎講を通じて聖地となった三崎海上も三浦氏本拠を維持する上で必須の宗教拠点であり、「広義の本拠」に含まれよう。

すでに齋藤慎一は、自身の本拠モデルの主要事例となった東国など「武家優位の地域社会」ではなく「寺社優位の地域では」と断った上で、本拠において武家・公家・寺家がそれぞれのパイプから在地支配に参画し総体として地域社会に対峙する「地域社会の権門体制」とし、本拠モデルに広義の枠組みを設ける必要性に触れている⁽¹⁶⁾。右の用語の是非はともかく、筆者は武家優位・寺社優位の別なく、いずれの本拠においても首都京都など権門都市群から地域社会に至る多様な人・モノ・情報のネットワークへアクセスし(Ⅱ「広義の本拠」)、その回路が政治・経済・文化などの諸側面で発揮されることで「狭義の本拠」がはじめて存立する、と考える。本論で設定した「広義の本拠」は、齋藤が本拠モデルに広義の枠組みを設ける必要性に触れた点を踏まえるに、氏の見通しを全面展開し体现したものと評価し得るが、それだけでは本拠が成立・維持・発

展するものと筆者は考えない。この点は五章の「本拠神話」にて述べた
い。

【3】本拠機能論

①本拠機能のネットワークモデル

本拠が成立・維持するためには、本拠を本拠たらしめる機能に着目する必要がある。先述した「広義の本拠」とは、まさに本拠存立に必要な不可欠な社会的諸機能の複合によって成り立つ。かかる機能性を重視した立場を、本稿ではかつての本拠空間論とは区別して、「本拠機能論」と呼称・定義し、本拠論の中核に位置づけたい。こうした立場から、各拠点をネットワーク体系として図示したものが【図3】本拠機能のネットワークモデルである。

【図3】の開発拠点とはかつて本拠空間論で扱われていた「狭義の本拠」と重なり、先述した山内首藤氏が備後国地毗莊本郷に設定した開発拠点「高山門田」という領域に近似する。「高山門田」内に水資源開発や宗教施設・流通拠点が蝟集された点を受けての設定である。円形の大きさは差異は、守護クラスや在来の国御家人、外来の西遷・北遷御家人、嫡流・庶流の違いによって勢力規模が異なる点を表現している。宗教拠点は開発拠点の領域よりも外縁にある聖地・霊場、さらには莊園鎮守・莊祈願寺、諸国一宮などを含む。流通拠点も地域社会のなかの宿・市・津・湊、町場的機能を有する場もあれば、都市（首都京都 鎌倉での在京活動・在鎌活動も含む）との関わりも包摂する。「↓」は本拠機能との関わりを示し、より多くの開発拠点（「狭義の本拠」）から「↓」が集まる宗教拠点は一宮や地域の大寺院であったり、流通拠点は多くの地域勢力が集う町場や港湾になる。円形の大きい「開発拠点」であればあるほど、多くの

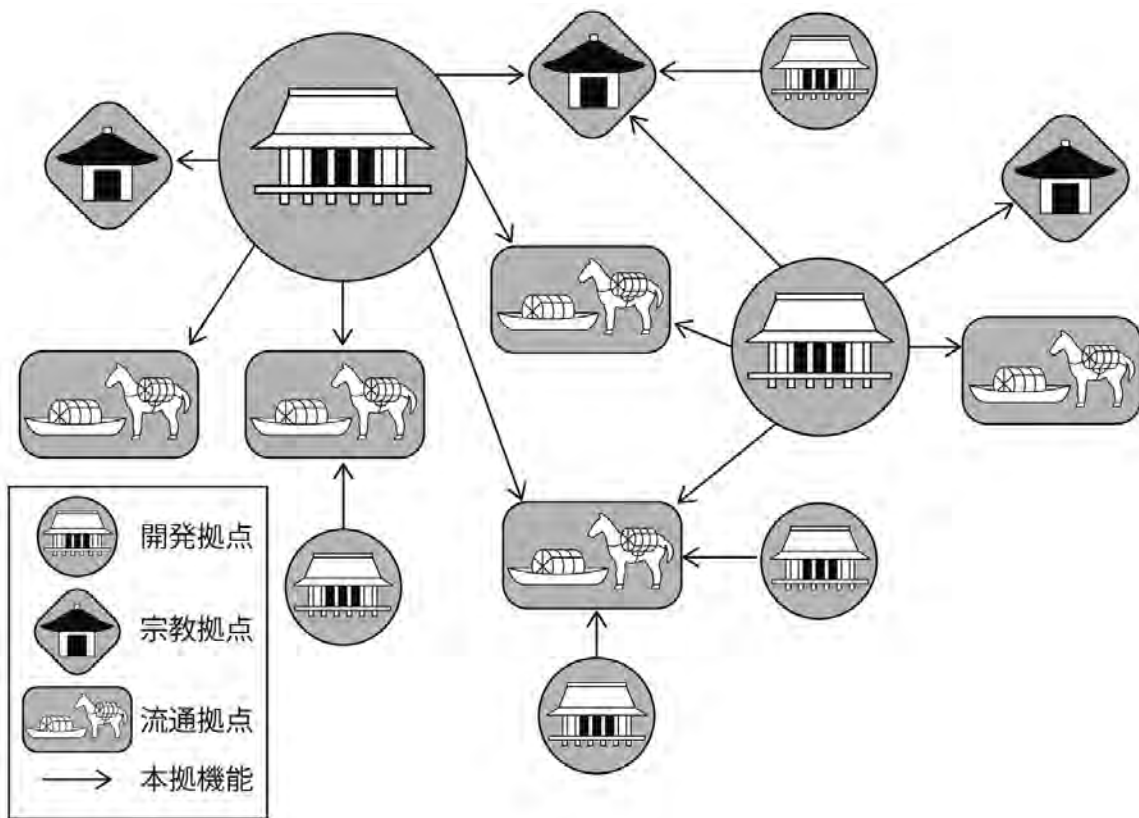


図3 本拠機能のネットワークモデル

宗教・流通拠点へコミットを果たし本拠機能を示す「↓」が多く繋がっている。

②本拠機能のレイヤーモデル

【図4】本拠機能のレイヤーモデルは、先の【図3】を立体的に図化したものである。

本拠空間論では平面的空間構成が示されてきた。しかし、本拠に立脚する武士は親族組織・構造のみならず、地域諸勢力と様々な関係を構築しながら存在する。既存のモデルでは本拠景観や領域的広がりを図示することはできても、復原された本拠の性格・特質（＝本拠の「個性」）を、かかる地に立脚した武士の諸活動へと逆照射させて把握し直す視座が弱かった。これら本拠空間論がこれまで実施されてきた景観復原作業において有効に作用したことは確かである。だが、本拠を捉えることで武士のいったい何が分かるのか、地域社会の政治史にどのような切り口を与えてくれるのか、そうした課題への接続が足りなかったのではないか。本拠研究が本拠のみを対象とした個別研究かつ景観復原研究のみに陥っていないか。武士・在地領主研究が膨大な研究蓄積を有する一方、本拠研究がこれまでそもそも研究史として十分に総括されず、本拠を捉えるモデルが空間論しか提出されてこなかった理由もやはりここにありう。

だが、開発を水資源開発という観点で捉えてみても、その実態は水資源開発の諸段階（湧水灌漑・溜池灌漑・河川灌漑）が重層的に積み重なり、複合的に利用されている。個々の領主が湧水のみを基盤に小支谷レベルで拠点化する場合、さらに緊密な親族組織が溜池を水源とする同一水利ユニットに属する場合、対立を孕みながら他姓の領主を含む広範囲

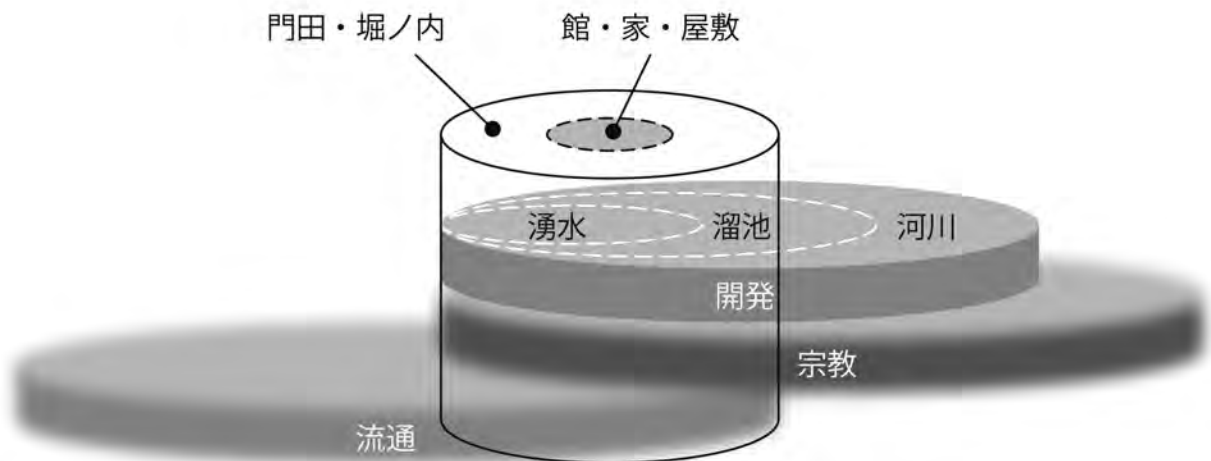


図4 本拠機能のレイヤーモデル

な河川灌漑の秩序を形成する場合、で武士らの政治的動向や一族結合は大きく異なる。水資源利用の格差が東国武士の政治的動向を決定付ける場面も出てくる⁽¹⁵⁾。根本かつ基盤となる水資源利用における格差が如実に武士たちの政治動向を規定していくのである。その一方で、宗教や流通のネットワークは開発の範疇をさらに越えて広がり、異なる位相を有す。備北の中山間部を本拠とする広沢氏は、広域ネットワークの存在から度重なる上級権力の圧力に屈せず生き延びていく。さらに在来勢力広沢氏の近隣に拠点形成を進めた山内首藤氏は広沢氏と姻戚関係を結び地域秩序に参入してくるが⁽¹⁶⁾、如上の南北朝内乱期における広沢氏の動向に頭を悩ませ、広沢氏への対抗が政治課題として急浮上し一揆体制構築へと結びつく⁽¹⁷⁾。ただし、山内首藤氏も内部では水資源利用の格差によって一枚岩になりきれない実情も抱えていた⁽¹⁸⁾。景観復原を通じて本拠で抉剔される「個性」は、武士たちの活動に多大な影響を及ぼすのである。

本拠機能は多様な位相（本稿では便宜的に開発・宗教・流通の三点とする）を持ち、それらが階層となつて「広義の本拠」を構成する。その位相毎に武士の諸動向は規定され、本拠もまた機能拡大に伴つて動態的に変遷していく。【図4】のモデルは本拠を階層かつ立体的・動態的に把握することで、武士の親族組織・構造や地域的ネットワークとの相関関係を捉え、彼らの諸活動を性格付ける要因を探ることを目指したものである。武士という社会集団が血縁関係に基づく一族のみならず多種多様な勢力から構成されていることはよく知られ、概念の再検証も進む⁽¹⁹⁾。その一族組織・構造の有様と本拠がどのようにリンクし、本拠の「個性」が武士たちの歴史的展開・政治的命脈にいかなる規定性を与えていくのか。武士と本拠の複雑かつ有機的相関関係を捉えるために、本拠機能のレイヤーモデルを導入する。

五 本拠神話の意義

最後に、本拠機能論において最も重要と考える「神話」について触れる。三章でも述べたように、小野正敏・斎藤慎一により館を含む武士本拠の宗教秩序・権威表象が、来世（外来文化）・現世（在来文化）という文化的要素から構成されていること、こうした要素が館・御堂の構造や景観構成で表現されていることが示されている⁽²⁰⁾。

ただし、そもそも来世と現世は截然と区分され得るものだろうか。佐藤弘夫による中世的神仏コスモロジーの諸研究成果によると、古代祟り神とされた「土地をシメル仏」は、中世荘園制の支配とコスモロジーが形成されるなかで賞罰を司る存在へと変貌を遂げ、宗教的秩序を体现する姿が見通されている⁽²¹⁾。また桜井好朗は『日本書紀』『古事記』などの記紀神話にとどまらない地域のなかの寺社縁起類から中世神話の世界を提示している⁽²²⁾。菌部寿樹は、中世村落が「村落神話」を持ち、記紀とは異なる村独自の自己認識を語る世界観が記述されていること、村落神話を祭祀によつて再現し、それをを行う集団組織の世俗的利益を正当化していることを指摘している⁽²³⁾。こうした研究からあらためて本拠研究史を顧みてみると、本拠での領主支配を正当化・正統化する言説への視座が極めて乏しかったことが分かる⁽²⁴⁾。筆者もこうした研究史の欠落を踏まえ、文化力に裏付けられた本拠の聖地化と威信の外部発信を「本拠を（荘厳）する」と概念化した⁽²⁵⁾が、これだけでは本拠の存立・維持を図ることは難しい。中世荘園制や村落での神話と同様に、武士本拠内にある社寺や遺跡といった個々の宗教的モニュメントが、本拠草創の起源を語る言説のもとで統合され、物語化され、そして儀礼などで演劇的に再現される必要がやはりある。つまり「神話」の創成が要求されるのだ。小野・齋藤の

これまでの宗教的・文化的機能を扱った本拠研究には、この「神話」が決定的に欠落している。⁽¹⁶⁾

本拠機能論では、「広義の本拠」に基づいて【図3】【図4】においてハード・ソフト両側面を含むネットワークモデル・レイヤーモデルを提示してきたが、それらに被覆して、機能が機能として稼働する血肉のよ
うな存在として「本拠神話」を措定する。すなわちハード・ソフト両面とはさらに別個の存在として「本拠神話」という「神話」を置くのである。勿論、そもそも「神話」自体に長い研究史が内包されているが、日本中世史分野での導入にあたっては、古代の記紀神話に対して「縁起における神々の「中世」は、そのような観念的機構を組みかえてゆくところからはじまった。したがって根源→始原としての神は、記紀神話の枠外に、すなわち既成の観念的機構をはみ出した民間信仰圏において出現する」と述べ、以後中世神話論を展開した桜井好朗の指摘が起点となる。⁽¹⁷⁾ そして中世神話の生成とは「記紀神話をふくめた古代神話に登場する神々を意味づけ直し、あらたな世界の根源→始原を設定しようとする試みであった」という。⁽¹⁸⁾ 神は民間信仰圏から発生するのであり（ゆえに、後に在地社会からの神話生成を見出す蘭部の「村落神話」が登場する）、彼らは中世の人々によって捉えなおされ、世界の根源→始原を説明するための存在へと新たに位置づけられる。神話とは歴史的に変貌するものであり、その背後に神話を創る人々が直面する現実とそれへと対峙し変革しようとする生々しい姿が明らかになったのである。神話は単なる観念的世界観のみにとどまるものではないのだ。桜井をはじめとする近年の中世神話論の成果を踏まえ、⁽¹⁹⁾ 筆者は、中世に列島各地で形成された武士本拠に付随して地域で創出され、かつ語られた、現実の領主支配の根源→始原として作用する起源譚を「本拠神話」と定義する。

例えばこれまで筆者は、武蔵国野本氏を事例に、後発で外来勢力として本拠形成を図った同氏が、既存の古墳を転用した経塚造営を通じて、自己の血統の源泉たる利仁流藤原氏の曩祖藤原利仁の墓所に見立てて本拠神話を創出し、本拠支配の正統性を表象するモニュメントとして再利用したことを明らかにした。⁽²⁰⁾ 神話の証言者としての機能を担った古墳において、藤原秀郷よりも鎮守府將軍としての活躍が遡って語られる英雄的武士藤原利仁が持ち出されたことは、野本氏が他の秀郷流藤原氏よりも血統的に卓越しようとする意識が濃厚に表れており、経塚では如法経供養という音楽を伴う極楽往生を希求する儀礼が催され、他の在来勢力の参加を得ながら聖地としての性格を纏い本拠を「莊嚴」していった。本拠神話の場合は本拠を「莊嚴」する場でもあったことになる。また西遷御家人として本拠形成を安芸国沼田荘で着手した小早川氏の事例でも、氏寺米山寺を在来領主沼田氏の勢力内にあった既存霊場の地に建立し、かつ家祖土肥実平の墓所に仕立て上げていく。⁽²¹⁾ 米山寺で催される迎講では、儀礼の最中に迎講創始者の小早川茂平が二月十五日に極楽往生を遂げたという本拠神話を創り、以後も語り継いでいる。迎講は本拠「莊嚴」化の手段だけではなく、領主支配を支える重要な宗教イベントであり、かつ小早川氏が創出した本拠神話を再現するものだったのである。本拠を構成する種々の宗教的・文化的装置は本拠神話という世界観のなかで秩序づけられ個々に意味が与えられて布置されていたのである。かつて本拠空間論で明らかとされてきた様々な武士本拠を構成する要素たちも、本拠神話の創出とその物語によって個々の機能を持たされ、有機的に構成されていったのである。

東国社会では十二世紀後半頃に武士本拠が形成され始め、鎌倉期～南北朝内乱期にかけて列島各地で数多の本拠が消長を経ながら確立してい

く。多くの武士本拠は既存の地域秩序のなかに入り混んで形成されるものばかりであり、地域には当然ながら宗教的コスモロジーで表象される神話世界（あるいは物語）が広がる。かかるなかに後発かつ外来勢力として武士が参入し本拠形成を企図する場合、神話の問題は避けて通ることはできない。武士本拠で創出され語り継がれる本拠神話の解明は、今後より一層重要な研究課題として立ち現れてこよう。

おわりに

すでに与えられた紙幅は尽きた。本稿を通じて、膨大な武士・在地領主研究を本拠研究史として整理を試み、従来の本拠空間論に対し、本拠機能論の立場をとる筆者の旗幟を鮮明化したつもりである。論じ残した点は多々あるが、本拠機能のネットワークモデルとレイヤーモデルは、今後とも筆者が事例研究を積み重ねるなかで明示していきたい。

筆者が主張する本拠機能論とは、武士本拠を基本的に「広義の本拠」で捉え、ハード・ソフトの両側面として①【図3】本拠機能のネットワークモデルと②【図4】本拠機能のレイヤーモデルを基盤としつつ、③これらに被覆する本拠神話を創出しそれを居館や社寺などの施設において儀礼・芸能として言説を再現し続けていく。この三つの要素が合わさって重要拠点たる「狭義の本拠」が最終的に存立するのである。本拠のあり方、その領域とはかつて「狭義の本拠」で素描されたごとく、館や単位所領といった空間内部に限った範囲ではない。本拠とはかかる距離のみによって規定された存在ではなく、首都京都や鎌倉などの権門都市群を頂点に地域社会まで包摂した様々な人・モノ・情報のネットワークのなかに有機的回路を持って存立する「広義の本拠」として存在するのであり、そこは「本拠神話」といった言説空間の創出とひろがりによって

支えられている¹⁰⁾。かかる位相を異にする座標軸によって構成される圏域が、まさに本拠と言っているのである。

「広義の本拠」を支える「本拠神話」は、実態社会との相関によって変貌を遂げ現実へ作用する。では、こうした観点からいかにして中世後期の本拠論を展望できるだろうか。勿論、南北朝内乱期頃から城館が登場し地域社会でネットワークを構築していったことは容易に想像されるが、城館の存在のみをもってして中世後期の本拠を説明できるものではなからう。筆者は三浦氏や小早川氏の事例などを踏まえ、武士本拠を〈莊厳〉するために行われた迎講が、政治性を帯びかつ本拠神話のなかで機能したことを指摘してきた。これらは安穩を体現し、地域の〈平和〉を創出するものであろう。しかし、多くの戦乱や恒常的な飢饉に直面し、安穩を切実に希求する実態社会のなかで生きる住人にとって、極楽浄土を体現する如上の儀礼・芸能だけでは浄土世界をよりリアルとして感じられなかったのではないだろうか。例えば、下総国の浄福寺では、かつて鎌倉後期に御家人東氏庶流の木内一族が良忠を招請して迎講を創始したが、少なくとも元亀二年（一五七二）までには地獄演劇を主題とする「鬼来迎」（墮地獄からの往生譚）へと変貌を遂げていく（その創始は粟飯原氏と伝承される）。音楽を用いた絢爛豪華な迎講は地域と人々の安穩を祈る儀礼であり、〈平和〉の象徴とも言い得るのかもしれないが、戦乱と飢饉の厳しい現実に向き合う領主と民衆にとって、いつしか既存の迎講は実態社会に安穩をもたらすものではなくなり、戦国期に迎講から地獄を主題とする鬼来迎への変成が推察されること。その背景に領主と寺院・村落が協働して新たな芸能を生成し言説を創り上げていった可能性を推定した¹¹⁾。中世後期になるほど「本拠神話」とそれを体現する儀礼・芸能は在地領主と地域諸勢力との合意関係以上に、より切実な課題として立ち

現れ、変貌を遂げていく。そこに中世後期における本拠存立の根本があるのではないか。すなわち、領主と住人が一体となって神話が創られ、その神話によって地域が維持されていくのではないか⁽¹⁵⁾。そのように筆者は見通している。

当然ながら、これらの見通しの妥当性は今後の検証にすべて委ねざるを得ない。しかし、地域に本拠を置く国人たちが、嘉慶三年(一三八九)に「一族地下共」に熊野詣を行ったり、天文十年(一五四一)に出雲国亀井氏出身の重善上人とその結縁者二名を伴って補陀落渡海を果たすなど、在地住人は〈平和〉や安穩を希求する儀礼・芸能の観客や客体としてではなく、主体として積極的な参加が見られるようになってくること⁽¹⁶⁾、加えて中世後期の地方寺院にて村人による大般若経調達事業や写経事業への参加があったことも勘案するならば、迎講から鬼来迎への変成はまさに在地住人の儀礼・芸能への参加による所産ではないだろうか。いずれもすべて今後の課題である。後考を期したい。

註

- (1) 日本城郭の主要な概説書として齋藤慎一・向井一雄『日本城郭史』(吉川弘文館、二〇一六年)をあげるにとどめたい。なお、紙幅の都合上、以下の引用論文・著書等の副題はすべて省略する。
- (2) 本拠の研究史を領域論として把握した齋藤慎一「序章」(同『中世東国の領域と城館』吉川弘文館、二〇〇二年)および氏の本拠論がまとめられた同『中世武士の城』(吉川弘文館、二〇〇六年)がある。
- (3) 齋藤前掲註(2)『中世武士の城』一七五〜一七七頁。「本拠」を書名に冠した落合義明『中世東国武士と本拠』(同成社、二〇二〇年)でも「中世前期の武士のよりどころとする場所、彼らの活動の主なよりどころ」(同書一頁)と述べてつても「本拠」の定義を基本的に齋藤に委ねる(この点は、拙稿「書評 落合義明著『中世東国武士と本拠』」『大東史学』四、二〇二二年にて指摘した)。
- (4) 研究史整理にあたり、「職」や武家領に関するものは本論から捨象している。武士の本拠形成・維持にあたり「職」や制度との関わりが重要な要素であることは認識しているが、それらは実態社会での実力に応じて上部権力によってオーソライズされるものであって、本拠存立において不可欠な要素とは考えないからである(在地社会で横行する当知行や悪党事件をみても明らかであろう)。本拠が存立するための実態社会での要因は何か。その解明こそ重要な検討課題だと考えている。
- (5) この点は、黒田日出男による「広義の開発史」の理解に準じる(同「広義の開発史と『黒山』」『日本中世開発史の研究』校倉書房、一九八四年、二八三頁)。
- (6) 今井林太郎「中世に於ける武士の屋敷地」(『社会経済史学』八一四、一九三八年)、奥田真啓「鎌倉武士の館に就て」(同『中世武士団と信仰』柏書房、一九八〇年(初出一九三八年))。
- (7) 豊田武『武士団と村落』(吉川弘文館、一九六三年)。
- (8) 石母田正『中世的世界の形成』(岩波書店、一九八五年(初出一九四六年))。
- (9) 村田修三「用水支配と小領主連合」(勝俣鎮夫編『中部大名の研究』吉川弘文館、一九八三年(初出一九六三年))。村田の中世城館遺跡と地域史研究の相関は同

- 「城跡遺跡と戦国史研究」(『日本史研究』二二二、一九八〇年)に詳しい。
- (10) 小山靖憲「東国における領主制と村落」(同『中世村落と荘園制』東京大学出版会、一九八七年(初出一九六六年)、同『鎌倉時代の東国農村と在地領主制』(同書、一九八七年(初出一九六八年)、峰岸純夫「東国武士の基盤」(同『中世の東国』東京大学出版会、一九八九年(初出一九七三年))など。
- (11) 榎原雅治・服部英雄・藤原良章・山田邦明「消えゆく中世の常陸」(『茨城県史研究』四一、一九七九年)。
- (12) 戸田芳實「在地領主制の形成過程」(同『日本領主制成立史の研究』岩波書店、一九六七年)、河音能平「中世社会成立期の農民問題」(同『中世封建制成立史論』東京大学出版会、一九七一年(初出一九六四年))。
- (13) 石井進「敵討ちとその周辺」(『中世武士団』小学館、一九七四年、一一〇～一二二頁)。
- (14) 石井前掲註(13)書、および同「地頭の開発」(同『鎌倉武士の実像』平凡社、一九八七年)。「鎌倉武士の実像」で石井の本拠モデルが整理・図化される(『中世武士とはなにか』三四一～三四三頁)。
- (15) 吉田敏弘「中世村落の構造とその変容」(『史林』六六一三、一九八三年)、海津一朗「鎌倉時代における東国農民の西遷開拓入植」(『中世東国史研究会編』『中世東国史の研究』東京大学出版会、一九八八年)、同「東国・九州の郷と村」(『日本村落史講座第二巻 景観Ⅰ(原始・古代・中世)』雄山閣出版、一九九〇年)、海老澤衷「中世城館の歴史的変遷」(『月報文化財』二九八、一九八八年)、竹本豊重「地頭と中世村落」(石井進編『中世の村落と現代』吉川弘文館、一九九一年)ほか多数。その一方、早くから高橋昌明は低湿地開発Ⅱ西遷御家人の開発と見做す従来の図式とは異なる開発形態を指摘し注目されるが(『西国地頭と王朝貴族』(同『洛中洛外』文理閣、二〇一五年(初出一九八一年))、その後の研究ではあまり深められていない。
- (16) 橋口定志「中世居館の再検討」(『東京考古』五、一九八七年)、同「中世方形居館を巡る諸問題」(『歴史評論』四五四、一九八八年)、同「中世東国の居館とその周辺」(『日本史研究』三三〇、一九九〇年)など。ただし、畿内の居館では平安後期に堀・大溝の出現が知られており注意を要する(中井均「中世城館の発生と展開」(『物質文化』四八、一九八七年)、村井毅史「中世城跡の堀の発生と展開」(『花園史学』一一、一九九〇年)など)。
- (17) 橋口定志・広瀬和雄・峰岸純夫・鼎談「中世居館」(『季刊自然と文化』三〇、一九九〇年)、蔭山兼治「堀内」の再検討(『琵琶湖博物館研究調査報告』二二、二〇〇四年)、齋藤・向井前掲註(1)書など。また堀内を自然環境や獣害対策との関わりで論じた中澤克昭「出土鉄鏃と武士の職能」(同『狩猟と権力』名古屋大学出版会、二〇〇三年(初出一九六六年))も注目される。
- (18) 服部英雄「景観にさぐる中世」(『新人物往来社』一九九五年)、同『地名の歴史学』(角川書店、二〇〇〇年)。
- (19) 高島緑雄「関東中世水田の研究」(日本経済評論社、一九九七年)。
- (20) 原田信男「村落景観の諸類型」(同『中世村落の景観と生活』思文閣出版、一九九九年)。
- (21) 金田章裕「微地形と中世村落」(吉川弘文館、一九九三年)、高橋学「古代末以降における地形環境の変貌と土地開発」(『日本史研究』三八〇、一九九四年)、同「平野の環境考古学」(古今書院、二〇〇三年)、佐野静代「古代末期～中世の開発画期と平野部荘園の灌漑水利」(同『中近世の村落と水辺の環境史』吉川弘文館、二〇〇八年(初出一九九七年))など。
- (22) 日本中世史での荘園現地調査・フィールドワークの歩みは、水野章二「中世史研究における現地調査」(佐藤和彦他編『日本中世史研究事典』東京堂出版、一九九五年)、高木徳郎「荘園地域調査の目的と方法」(同『日本中世地域環境史の研究』校倉書房、二〇〇八年)、拙稿「圃場整備地域の景観復原技法確立と地域実践―滋賀県甲賀市水口町の前近代水資源開発と社会集団の関わりから―」(『学術研究助成報告書』六、公益財団法人国土地理協会、二〇二一年(初出二〇一九年))などを参照。
- (23) 高木徳郎「中山間荘園における開発と在地領主」(同『日本中世地域環境史の研究』校倉書房、二〇〇八年)、同「在地領主と用水開発」(小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『考古学と中世史研究』一〇「水の中世」高志書院、二〇一三年)、大井

- 教寛「武蔵国熊谷郷の開発と在地領主」(地方史研究協議会編『北武蔵の地域形成』雄山閣、二〇一五年)、同「在地領主の拠点開発と展開」(『地方史研究』六八六、二〇一八年)など。取り扱う時間幅が広いため本文で詳細な言及はしなかったが、居館と村落の類型モデル(居館主導型村落・居館縁辺型・居館分離型・村落独立型)を提示した中井均「居館と村落」(同『中世城館の実像』高志書院、二〇二〇年(初出二〇〇四年))もある。
- (24) 白水智「肥前青方氏の生業と諸氏結合」(『中央史学』一〇、一九八七年)、同「知られざる日本山村の語る歴史世界」(NHK出版、二〇〇五年)、高橋修「海辺の水軍領主、山間の水軍領主」(同『中世水軍領主論』高志書院、二〇一三年(初出二〇〇五年))、高木前掲註(23)「中山間荘園における開発と在地領主」「在地領主の用水開発」など。
- (25) 落合義明「中世東国の洪水と堤防」(『中世武蔵国における宿の形成』(落合前掲註(3)書所収)。また中世都市鎌倉内部では、幕府有力御家人層の屋敷地周辺で治水対策としての木組み側溝や河川護岸の発掘事例が紹介されており(宇都海洋「木組み側溝からみた鎌倉遺跡群の区画」五味文彦・小野正敏・玉井哲雄編『都市を区切る』山川出版社、二〇一〇年)、利水だけでなく排水の観点での検討も今後重要になってこよう。
- (26) そうしたなか、圃場整備完了地域での景観復原方法を模索する貴田潔『筑後国水田荘故地調査報告書(地誌編・史料編)』(地域資料叢書二三、花書院、二〇一四年)や拙稿「圃場整備地域の景観復原技法確立と地域実践」(『学術研究助成報告書』六、公益財団法人国土地理協会、二〇二二年(初出二〇一九年))などの成果が開始している。
- (27) コミュニケーションの一環として戦争・紛争と秩序形成を捉える視点は、藤木久志監修/服部良久・蔵持重裕編『紛争史の現在』(高志書院、二〇一〇年)、服部良久編『コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ史』(ミネルヴァ書房、二〇一五年)を参照。
- (28) 石母田前掲註(8)書、一八〇頁。
- (29) 河合正治「小早川氏の発展と瀬戸内海」(同『中世武家社会の研究』吉川弘文館、一九七三年(初出一九五二年))、工藤敬一「鎌倉時代の領主制」(『荘園制社会の基本構造』(校倉書房、二〇〇二年(初出一九六一年))、佐藤和彦「国人領主制の構造的展開」(同『南北朝内乱史論』東京大学出版会、一九七九年(初出一九六三年))。
- (30) 三浦圭一「中世における畿内の位置」(同『中世民衆生活史の研究』一九七六年(初出一九六五年))、戸田芳実「御厨と在地領主」(同『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、一九九一年(初出一九七〇年))。
- (31) 齊藤利男「荘園公領制社会における都市の構造と領域」(『歴史学研究』五三四、一九八四年)。
- (32) 海津一朗「中世在地社会における秩序と暴力」(『歴史学研究』五九九、一九八九年)、海津前掲註(15)論文「東国・九州の郷と村」。
- (33) 佐藤和彦「悪党研究の視点」(同『南北朝内乱史論』東京大学出版会、一九七九年(初出一九六九年))。
- (34) この点は、渡邊浩史「悪党の結合形態について」(『史叢』三三、一九八三年)、同「流通路支配と悪党」(『年報中世史研究』一六、一九九一年)や悪党研究会編『悪党の中世』(岩田書院、一九九八年)の諸論考を参照。
- (35) 歴史学研究会日本中世史部会運営委員会ワーキング・グループ「地域社会論」の視座と方法」(『歴史学研究会』六七四、一九九五年)。
- (36) 高橋修「中世前期の地域社会における領主と住民」(同『中世武士団と地域社会』清文堂、二〇〇〇年(初出一九九一年))。
- (37) 高橋修「中世前期の在地領主と「町場」」(『歴史学研究』七六八、二〇〇二年)、同「武蔵国における在地領主の成立とその基盤」(浅野晴樹・斎藤慎一編『中世東国の世界1北関東』高志書院、二〇〇三年)など。
- (38) 網野善彦「増補無縁・公界・楽」(平凡社、一九八七年)、同『日本中世都市の世界』(筑摩書房、一九九六年(初出一九七六年))など。
- (39) 網野善彦・石井進編『帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 中世都市と商人職人』(名著出版、一九九四年)、峰岸純夫・村井章介編『中世東国の物流と都市』(山川出版社、一九九五年)、岡陽一郎「中世居館再考」(五味文彦編『中

- 世の空間を読む』吉川弘文館、一九九五年）、落合義明『中世東国の「都市的な場」と武士』（山川出版社、二〇〇五年）など。
- (40) 藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』（東京大学出版会、一九八五年）、同『村と領主の戦国世界』（東京大学出版会、一九九七年）、川合康『治承・寿永の「戦争」と鎌倉幕府』（同『鎌倉幕府成立史の研究』校倉書房、二〇〇四年）。
- (41) 小林一岳『鎌倉と南北朝の領主と探と知行』（『日本中世の探と戦争』校倉書房、二〇〇一年（初出一九九二年））。
- (42) 前掲註(27)各書他に、佐藤公美『中世イタリアの地域と国家』（京都大学出版会、二〇一二年）、小林一岳編『日本中世の山野紛争と秩序』（同成社、二〇一八年）などがある。
- (43) 川合康『治承寿永の内乱と地域社会』（『歴史学研究』七三〇、一九九九年）。清水亮『中世武士畠山重忠』（吉川弘文館、二〇一八年）でも同様の用語が使用される（同書二四頁）。近年、高橋典幸によつて南北朝期の城郭戦の実態と地域交通の関わりも論じられている（同『南北朝期の城郭戦と交通』東京大学日本史学研究室紀要別冊『日本政治社会論叢』二〇一三年、同『南北朝・室町期南九州の城郭』齋藤慎一編『城館と中世史料』高志書院、二〇一五年）。ただし、軍事動員への呼応や一揆体制構築は、個々の武士が抱える政治的・社会的状況に大きく規定される側面（開発・流通・宗教的要素に基づく利害関係や血縁関係・主従関係など）が大きく、アドホック（臨時・時限）的性格が濃厚と考えられる。いづれにせよ、本拠を軍事・戦時の観点で把握する視角は重要であり、今後とも検討を続ける必要がある。
- (44) 高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』（東京大学出版会、一九九九年）、元木泰雄『武士の成立』（吉川弘文館、一九九四年）。
- (45) 野口実『源氏と坂東武士』（吉川弘文館、二〇〇七年）、川合康『内乱期の軍制と都の武士社会』（同『院政期武士社会と鎌倉幕府』吉川弘文館、二〇一九年（初出二〇〇四年））、同『中世武士の移動の諸相』（同書（初出二〇〇七年））など。
- (46) 野口実『増補改訂中世東国武士団の研究』（戎光祥出版、二〇一二年（初出一九九四年））。
- (47) 須藤聡『平安末期義国流の在京活動』（『群馬歴史民俗』一六、一九九五年）、伊藤瑠美『一一〜一二世紀における武士の存在形態』（『古代文化』五六・八・九、二〇〇四年）、生駒孝臣『中世の畿内武士団と公武政権』（戎光祥出版、二〇一四年）など。
- (48) 服部英雄『武士と荘園支配』（山川出版社、二〇〇四年）。
- (49) 田中大喜『長楽寺再建事業にみる新田氏と「得宗専制」』（同『中世武士団構造の研究』校倉書房、二〇一一年（初出二〇〇一年））、同『南北朝期在地領主論序説』（同書（初出二〇〇六年））、清水亮『了珍房妙幹と鎌倉末・南北朝期の常陸長岡氏』（同編『常陸眞壁氏』戎光祥出版、二〇一六年（初出二〇〇五年））など。
- (50) 井上聡『御家人と荘園公領制』（五味文彦編『日本の時代史八 京・鎌倉の王権』吉川弘文館、二〇〇三年）、湯浅治久『中世東国の地域社会史』（岩田書院、二〇〇五年）、同『御家人経済』の展開と地域経済圏の成立』（五味文彦編『交流・物流・越境』新人物往来社、二〇〇五年）。
- (51) 高橋慎一郎『中世の都市と武士』（吉川弘文館、一九九六）、同『武家の古都、鎌倉』（山川出版社、二〇〇五年）、秋山哲雄『北条氏権力と都市鎌倉』（吉川弘文館、二〇〇六年）、同『鎌倉と鎌倉幕府』（『歴史学研究』八五九、二〇〇九年）。
- (52) 秋山哲雄『移動する武士たち』（同『鎌倉を読み解く』勉誠出版、二〇一七年（初出二〇〇八年））。
- (53) 山本隆志『辺境における在地領主の成立』（同『東国における武士勢力の成立と発展』思文閣出版、二〇一二年（初出二〇〇二年））、同『関東武士の都・鄙活動』（同書（初出二〇〇六年））。
- (54) 落合義明『利仁流藤原氏と武蔵国』（同『中世東国武士と本拠』同成社、二〇一〇年（初出二〇一〇年））、高橋修『中世東国の在地領主と首都・京都』（大阪市立大学都市文化研究センター編『都市の歴史的形成と文化創造力』清文堂出版、二〇一一年）、山野龍太郎『小代行平に関する覚書』（『日本史学集録』四〇、二〇一九年）、同『野本氏と押垂氏の周辺』（『埼玉地方史研究』七八、二〇一〇年）など。
- (55) 菊地浩幸・清水亮・田中大喜・長谷川裕子・守田逸人『中世在地領主研究の成果

- と課題」(『歴史評論』六七四、二〇〇六年)。
- (56) 池享「領主制理論の射程」(佐藤和彦編『中世の内乱と社会』東京堂出版、二〇〇七年)。
- (57) 秋山前掲註(52) 論文。
- (58) 現状の総括として高橋修「武士団と領主支配」(大津透・桜井英治・藤井讓治・吉田裕・李成市編『岩波講座日本歴史六巻 中世1』岩波書店、二〇一三年)がある。
- (59) 高橋前掲註(37)「中世前期の在地領主と「町場」」。
- (60) 田中大喜「中世前期の在地領主と町場の城館」(齋藤慎一編『城館と中世史料』高志書院、二〇一五年)。
- (61) 高橋修「信仰の中世武士団」(清文堂、二〇一六年)、同「中世前期武士団の本領と霊場」(中世学研究会編『城と聖地』高志書院、二〇二〇年)。
- (62) 歴史学における社会史の成果は、朝尾直弘・網野善彦・山口啓一・吉田孝編『日本の社会史 一〜八巻』(岩波書店、一九八七年)に詳しい。
- (63) 「文化」概念の系譜や変遷については、さしあたり前川啓治・箭内匡・深川宏樹・浜田明範・里見龍樹・木村周平・根本達・三浦敦「21世紀の文化人類学」(新曜社、二〇一八年)、ピーター・バーク著/長谷川貴彦訳『増補改訂版第二版 文化史とは何か』(法政大学出版会、二〇一九年)、鈴木康治『経済人類学入門【理論的基礎】】(作品社、二〇二〇年)などでの研究史を参照し、本稿では人びとの生存装置・社会構造として機能する「文化」概念も踏まえて用いることとする。
- (64) 武士本拠をめぐる宗教的機能については、氏寺・氏社の観点から高橋修「序論 信仰の中世武士団」(同『信仰の中世武士団』清文堂、二〇一六年)や、城と聖地の観点から中澤克昭「序論」(中世学研究会編『城と聖地』高志書院、二〇二〇年)の整理があり、本稿も参考にした。
- (65) 奥田真啓「武士団と神道」(同『中世武士団の信仰』(柏書房、一九八〇年(初出一九三九年)、同「武士の氏寺の研究」(同書(初出一九四一年)ほか。
- (66) 黒田俊雄「村落共同体の中世的性質」(同『日本中世封建論』東京大学出版会、一九七四年(初出一九六一年)、河合正治「中世武士団の氏神氏寺」(小倉豊文編『地域社会と宗教の史的研究』柳原書店、一九六三年)、河音能平「若狭国鎮守二宮縁起の成立」(同『中世封建制成立史論』東京大学出版会、一九七一年(初出一九七〇年)など)。
- (67) 石井前掲註(13) 書「兵」から鎌倉武士団へ。
- (68) 湯浅治久「室町・戦国期の地域社会と「公方・地下」」(同『中世後期の地域と在地領主』吉川弘文館、二〇〇二年(初出一九九四年)、同「武家一円領における「指出」の形成」(同書(初出一九九七年)、同「公方」大原氏と地域社会」(同書)など)。
- (69) 山田康弘「十四世紀前中期の動乱期における京郊中小豪族の動向」(『遙かなる中世』一三、一九九四年)、川岡勉「南北朝期の在地領主・氏寺と地域社会」(『ヒストリア』一四二、一九九四年)、渡邊浩史「惣有財産」(佐藤和彦編『租税』東京堂出版、一九九七年)、徳永裕之「備中南部における地域社会と氏寺」(悪党研究会編『悪党と内乱』岩田書店、二〇〇五年)など。
- (70) 荻米一志「荘園社会における地頭御家人と寺社」(同『荘園社会における宗教構造』校倉書房、二〇〇四年(初出二〇〇二年)、同「中世前期における地域社会と宗教秩序」(『歴史学研究』八二〇、二〇〇六年)。
- (71) 齋藤前掲註(2) 書『中世武士の城』一七五〜一七七頁。
- (72) 山本隆志「東国における武士と法会・祭礼との関係」(同『東国における武士勢力の成立と展開』思文閣出版、二〇二二年(初出二〇一一年))。
- (73) 高橋前掲註(61) 書・論文。
- (74) 田中大喜「中世在地領主による「平和」の創成・維持と地域社会」(『人民の歴史学』二二七、二〇一八年)。
- (75) 中野豈任「忘れられた霊場」(平凡社、一九八八年)。
- (76) 市村高男「中世城郭論と都市についての覚書」(『歴史手帖』一五一四、一九八七年)。
- (77) 飯村均「聖地」の考古学」(同『中世奥羽の考古学』高志書院、二〇一五年(初出一九九七年)、中澤克昭「中世の武力と城郭」(吉川弘文館、一九九九年)。
- (78) 五味文彦「館の社会史」(『神奈川地域史研究』一一、一九九三年)、同「中世の

- 館」(『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす 中世の館と都市』朝日新聞社、一九九四年)。館が文化サロンとしての性質を持つことは、国司館の事例を取り上げた高橋修「中世武士団の形成と地域社会」(『ヒストリア』一四九、一九九五年)の指摘もある。
- (79) 小野正敏「中世武士の館、その建物系譜と景観」(小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『中世の系譜』高志書院、二〇〇四年)二〇四・二〇五頁。
- (80) 大澤伸啓「鎌倉時代関東における浄土庭園を有する寺院について」(『唐澤考古』一一、一九九三年)、同「武蔵武士と浄土庭園」(峰岸純夫監修/埼玉県立嵐山史跡の博物館編『東国武士と中世寺院』高志書院、二〇〇八年)、同「樺崎寺跡」(同成社、二〇一〇年)、飯村均「館と寺社」(小野正敏ほか編『中世寺院武力と暴力』高志書院、二〇〇七年)など。
- (81) 齋藤前掲註(2) 書『中世武士の城』一七五〜一七七頁。
- (82) 齋藤慎一「戦国城館の構造と聖地」(中世学研究会編『城と聖地』高志書院、二〇一〇年)六九・七〇頁。
- (83) 例えば落合義明はこのモデル化の有効性が、全国規模で実証され始めたのではないかと述べ(落合前掲註(3) 書二頁)、齋藤の本拠モデルに就いた特別展も開催された(特別展示図録『中世武士団』国立歴史民俗博物館、二〇一二年)。
- (84) 齋藤前掲註(2) 書『中世武士の城』一八七頁。この点は拙稿前掲註(3) 書評でも指摘した。
- (85) 小野正敏「中世みちのくの陶磁器と平泉」(平泉文化研究会編『日本史の中の柳之御所』吉川弘文館、一九九三年)、同「威信財としての貿易陶磁と場」(小野正敏・萩原三雄編『戦国時代の考古学』高志書院、二〇〇三年)、同「館・屋敷をどう読むか―戦国期武家館を素材として―」(『発掘調査成果でみる一六世紀大名居館の諸相―シンポジウム報告―』東国中世考古学研究会、二〇一六年)など。
- (86) 八重樫忠郎・高橋一樹編『中世武士と土器』(高志書院、二〇一六年)、中世学研究会編『幻想の京都モデル』(高志書院、二〇一八年)、八重樫忠郎『平泉の考古学』(高志書院、二〇一九年)など。
- (87) 外村久江『早歌の研究』(至文堂、一九六五年)、同「鎌倉武士と芸能」(同『鎌倉文化の研究―早歌創造をめぐる―』三弥井書店、一九九六年(初出一九七二年))。
- (88) 外村久江「早歌」(『撰要両曲集』の成立と比企助員」(『日本歌謡研究』二〇、一九八一年)。最近では永井晋「比企氏の乱実史」(まつやま書房、二〇一二年)もある。
- (89) 小林一彦「新和歌集撰考」(『三田国文』九、一九八八年)、同「宇都宮歌壇の再考察―笠間時朝・浄意法師を中心に―」(『国語と国文学』六五―三、一九八八年)、同「宇都宮歌壇―京文化への回路 塩谷朝業と実朝」(『国文学』解釈と鑑賞』六七、二〇〇二年)。
- (90) 小川剛生「武士はなぜ歌を詠むか」(角川学芸出版、二〇〇八年)、同『和歌所の鎌倉時代』(NHK出版、二〇一四年)。
- (91) 有木芳隆「総論中世球磨の仏像」(図録『ほとけの里と相良の名宝展』熊本県立美術館、二〇一四年)、同「九州球磨郡の平安後期・仏師動向と在地領主の造像活動」(津田徹夫編『仏教美術論集六 組織論』竹林舎、二〇一六年)、同「中世球磨郡の仏像制作と京都」(中世学研究会編『幻想の京都モデル』高志書院、二〇一八年)など。
- (92) 塩澤寛樹「成朝、運慶と源頼朝」(『日本橋学館大学紀要』三、二〇〇四年)、同『鎌倉時代造像論』(吉川弘文館、二〇〇九年)、同『大仏師運慶』(吉川弘文館、二〇一二年)。
- (93) 長岡龍作「仏像」(敬文舎、二〇一四年)、同「仏像と造形」(中央公論美術出版、二〇一二年)。
- (94) 高橋修「笠間時朝論序説」(江田郁夫編『中世宇都宮氏』戎光祥出版、二〇一〇年)。
- (95) 西岡芳文「東京・王子田楽」の復活」(『歴史評論』四七三、一九八九年)、同「中世豊島郡の信仰と神社」(峰岸純夫・小林一岳・黒田基樹編『豊島氏とその時代』新人物往来社、一九九八年)。
- (96) その後、落合義明「陣と芸能」(『城下町の形成と芸能』(落合前掲註(39) 書所収(初出一九九九年・二〇〇〇年))などがあるが、この分野の成果は極めて僅少で

- ある。
- (97) 山路興造「伎楽・舞楽の地方伝播」(同『中世芸能の底流』岩田書院、二〇一〇年(初出一九九五年)、井原今朝男「増補中世寺院と民衆」(臨川書院、二〇一三年(初出二〇〇九年))。
- (98) 荻美津夫「鎌倉幕府と雅楽」(同『古代中世音楽史の研究』吉川弘文館、二〇〇七年(初出一九七八年)、同「鎌倉時代における舞楽の伝播について」(大隅和雄編『鎌倉時代文化伝播の研究』吉川弘文館、一九九三年)、中本真人「鶴岡八幡宮の二季の御神楽」(同『宮廷御神楽芸能史』新典社、二〇一三年(初出二〇〇八年))、磯水絵「関東の雅楽」(『中世文学』五九、二〇一四年)。
- (99) 豊永聡美「鎌倉武士と琵琶の文化圏」(福田豊彦・関幸彦編『鎌倉』の時代』山川出版社、二〇一五年)、拙稿「中世都市鎌倉と地下楽家中原氏」(『神奈川県立博物館(人文科学)』四六、二〇一九年)、同「初期鎌倉幕府の音楽と京都社会」(『同』四七、二〇二〇年)、同「鎌倉幕府の音楽と地下楽人」(『同』五〇、二〇二三年)。
- (100) 拙稿「中世房総の菩薩面と迎講」(『民俗芸能研究』七四、二〇二三年)。
- (101) 八重樫忠郎「北のつわものもの都」(新泉社、二〇一五年)、池谷初恵「鎌倉幕府草創の地」(新泉社、二〇一〇年)、水口由紀子「武蔵・下野の土器」(八重樫忠郎・高橋一樹編『中世武士と土器』高志書院、二〇一六年)。
- (102) 前掲註(86)の各書など。
- (103) 水口由紀子「武蔵武士と経塚」(埼玉県立嵐山史跡の博物館編『東国武士と中世寺院』高志書院、二〇〇八年)、同「地域史研究のなかの経塚」(『歴史評論』七二七、二〇一〇年)など。
- (104) 最近のまとまった成果として千々石到・浅野晴樹編『板碑の考古学』(高志書院、二〇一六年)がある。
- (105) 小林康幸「鎌倉永福寺跡出土瓦の諸問題」(『立正考古』三二、一九九二年)、同「埼玉県下に分布する永福寺式軒瓦について」(『埼玉考古』三六、二〇〇一年)、石川安司「東松山市西浦遺跡出土の中世瓦」(『比企丘陵』三四、一九九八年)、同「瓦・仏像・浄土庭園遺構」(峰岸純夫監修／埼玉県立嵐山史跡の博物館編『東国武士と中世寺院』高志書院、二〇〇八年)、神奈川県立歴史博物館監修『永福寺と鎌倉御家人』(小き子社、二〇二二年)。
- (106) 関口和也「入西のビャクシン」(埼玉県坂戸市教育委員会、一九九三年)、西岡芳文「歴史のなかのイチョウ」(『年報三田中世史研究』五、一九九八年)。
- (107) 小笠原長和「東国における学僧の活動」(『地方史研究』七三、一九六五年)、小此木輝之「中世寺院と関東武士」(青史出版、二〇〇二年)など。
- (108) 平雅行「鎌倉山門派の成立と展開」(同『鎌倉時代の幕府と仏教』塙書房、二〇二四年(二〇〇〇年))ほか。
- (109) 体系的なものとして、著書に野口実『東国武士と京都』(同成社、二〇一五年)、同『列島を翔ける平安武士』(吉川弘文館、二〇一七年)があり、武士一族出身僧侶の分析に同「東国出身僧の在京活動と入宋・渡元」(『鎌倉遺文研究』二五、二〇一〇年)、同「鎌倉時代における下総千葉寺田縁の学僧たちの活動」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』二四、二〇一一年)などがある。
- (110) 落合義明「比企の観音霊場をめぐる武士たち」(落合前掲註(3)書所収(初出二〇〇八年))、高橋修「中世東国の在地領主と首都・京都」(大阪市立大学都市文化研究センター編『都市の歴史的形成と文化創造力』清文堂出版、二〇一一年)、山野龍太郎「小代行平に関する覚書」(『日本史学集録』四〇、二〇一九年)など。
- (111) 野口実「東国武士西遷の文化・社会的影響」(同編『千葉氏の研究』名著出版、二〇〇〇年)。
- (112) 文化伝播における領主権力反映論の警鐘は、菊地大樹「中世東国文化伝播論再考」(近藤祐介・菊地大樹編『寺社と社会の接点』高志書院、二〇二二年)八五頁にてなされている。
- (113) 例えば、拙稿「二つの中世陵王面」(『民具マンスリー』五四―三・五五―一、二〇二二年・二〇二三年)、同「初期鎌倉幕府の文化源流としての伊豆・駿東地域」(貴田潔・湯浅治久編『諸国往反の社会史』高志書院、二〇二四年)など。
- (114) 小野正敏『戦国城下町の考古学』(講談社、一九九七年)。
- (115) 寛元元年(一二四三)五月日「地頭大神惟家申状」(『鎌倉遺文』九卷六一―八七

- 号)。
- (116) 『源平闘諍録』下二、加曾利の冠者、千田判官代親正と合戦する事」。
- (117) 地毗荘の概要は、服部英雄「備後国地毗庄の復原的研究」(同『景観にさぐる中世』新人物往来社、一九九五年)に詳しい。
- (118) 『大日本古文書家わけ第十五 山内首藤家文書』五八号。以下「山」と略記。
- (119) 元応二年(一二三〇)九月二十五日「関東下知状写」にて「被召放重代本領之条」とある(『大日本古文書家わけ第十一 小早川家文書之二』二八五号など)。
- (120) 『日本中世法制史料集第一巻』附録一。
- (121) 拙稿「在地領主における嫡子単独相続の形成過程と二つの所領相伝関係」(『鎌倉遺文研究』三四、二〇一四年)。
- (122) 拙稿「建武政権・南朝の武力編成と地域社会」(悪党研究会編『南北朝「内乱」』岩田書院、二〇一八年)。
- (123) なお高橋修は地域社会を「固有の生活・活動形態をもつ歴史的主体としての諸階層が、相互にかかわりあうことにより作り出される政治的・経済的・文化的領域のこと」(高橋前掲註(36)書『中世武士団と地域社会』一頁)と規定し、そのなかに本領を置いて議論を展開する。地域社会の捉え方について異論はないが、本拠の存立を捉える視点においては首都京都など権門都市群との関わりが不可欠な事例もあることを踏まえるに、地域社会だけに「広義の本拠」の範囲を限定できるものではないと考える。
- (124) 網野前掲註(38)書、田中(60)論文など。
- (125) 以下、拙稿「石見国長野荘俣賀氏の本拠景観と生業・紛争」(国立歴史民俗博物館研究報告二二二、二〇一八年)、同「西遷御家人内田氏の本拠景観と高津川流域」(田中大喜編『中世武家領主の世界』勉誠出版、二〇二二年)を参照。
- (126) 応永十二年(一四〇五)八月一日「野州家通預ヶ状并山内熙次証判」(『広島県史古代中世資料編IV』「児玉文書」五号)。
- (127) 備後国一宮吉備津神社については、榎原雅治「三つの吉備津宮をめぐる諸問題」(二宮研究会編『中世一宮制の歴史的展開』岩田書院、二〇〇四年)を参照。
- (128) 『福山志料』巻一八所収の応永元年(一二三九)十月十七日「座直り古図」を参照。
- (129) 照。山内首藤氏と地域的宗教秩序との関わりは別稿を準備している。
- (130) 石井前掲註(14)書七七〜八一頁、齋藤前掲註(2)書『中世武士の城』一七七〜一八一頁。
- (131) 拙稿「武士本拠を〈荘厳〉する」(『日本宗教文化史研究』五五、二〇二四年)、同「佐原氏本拠の文化環境と威信競合」(『三浦一族研究』二九、二〇二五年)。
- (132) 斎藤前掲註(2)書『中世武士の城』「あとがき」二〇四・二〇五頁。
- (133) 開発と流通機構との関係が表裏一体であることは、すでに海津一朗の本拠モデルでも示されており既知であろう。加えて、筆者は安芸国三入荘熊谷氏を事例に、同氏によって「堀ノ内」に勧請された弁才天が、水資源開発の高度化を宗教面から支える開発神として機能した点を指摘した(拙稿「狐の秘法と中世開発」『未六六、二〇二三年)。開発もまた宗教と表裏一体であり、【図3】本拠機能のネットワークモデルの「開発拠点」に流通・宗教の機能を含めることに問題はないと考える。
- (134) すでに「都の武士論」とそれに続く諸研究が明らかにしてきたように、武士本拠の成立・維持・発展に首都京都・鎌倉の影響を全く排して考えることはできず、この点は京都モデルの受容を見出した斎藤慎一の見解を批判的に継承すべきである。本拠機能を地域社会内部だけに埋没させて理解するのではなく、宗教拠点・流通拠点(人的ネットワークの形成も含め)には当然ながら首都京都・鎌倉との繋がりも組み込む必要がある。
- (135) 拙稿「崖線の在地領主」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二〇九、二〇一八年)、同「北武蔵の武士本拠と湧水開発」(『シンポジウム「武蔵武士とその本拠」資料集』埼玉県立嵐山史跡の博物館、二〇一八年)、同「湧水は中世景観を語れるのか」(『民衆史研究』一〇一、二〇二二年)、同「備後国地毗荘山内首藤氏本拠の水利復原研究」(『神奈川県立博物館(人文科学)研究報告』五一、二〇二五年)など。
- (136) 拙稿前掲註(134)「北武蔵の武士本拠と湧水開発」。
- (137) 貞和元年(一三四五)六月十八日「山内時通讓状」(『山』四九号)。
- (138) 拙稿「貞和七年山内首藤氏一族」『探の再検討』(『年報三田中世史研究』二二、二〇二二年)。

- 〇一四年)。
- (138) 拙稿前掲註(134)「備後国地毗莊山内首藤氏本拠の水利復原研究」。
- (139) 野口前掲註(45)書、山本前掲註(53)書、八重樫・高橋前掲註(86)書など多数。
- (140) 小野前掲註(79)論文、斎藤前掲註(2)書『中世武士の城』。
- (141) 佐藤弘夫「日本の伝説の誕生」(同『アマテラスの変貌』法藏館、二〇〇〇年)。
- (142) 桜井好朗『神々の変貌』(筑摩書房、二〇〇〇年(初出一九七六年))。
- (143) 「村落神話」(同『村落内身分と村落神話』校倉書房、二〇〇五年(初出一九九四年))、「村落神話の諸相」(同『中世村落の文書と宮座』小さ子社、二〇一三年)。
- (144) 武士本拠そのものの事例ではないが、在地領主層のイデオロギー的支配の解明が本格的に取り組まれたのは河音能平「若狭国鎮守二宮縁起の成立」(河音前掲註(10)書所収、初出一九七〇年)の研究が嚆矢であろう。中世奥羽社会の武士による系譜・歴史認識の生成過程を検討した人間田宣夫『中世武士団の自己認識』(三弥井書店、一九九八年)、同『中世奥羽の自己認識』(三弥井書店、二〇一二年)もまとまった成果として重要である。
- (145) 拙稿前掲註(130)「武士本拠を〈荘厳〉する」、同「女が創る武士本拠の文化基盤」(『日本宗教文化史研究』五六、二〇一四年)。
- (146) こうしたなか、信仰で結ばれる武士の一族組織と本拠支配を明らかにした高橋前掲註(61)書は貴重な成果といえよう。
- (147) 膨大な神話研究の歩みを繙くと、早くに柳田国男は「神話は本来神聖なものであった。定まった日時に、定まった人が定まった方式をもってこれを語り、聞く者がごとごとくこれを信じ、もしくは信ぜざる者の聞くことを許されぬ古風の説話であった」(『桃太郎の誕生』株式会社KADOKAWA、二〇一五年(初出一九三三年)二二頁)として昔話と峻別する。人類学ではB・マリノフスキーが現実の儀式・式典・社会的道徳規範といった伝統を正当化するための機能として神話をとらえ、「神話は不断に再生されている。すべての歴史的变化が神話を生み出すが、しかしその神話は、間接的に歴史的事実と関連しているにすぎない」(宮武公夫・高橋巖根訳『呪術・科学・宗教・神話』人文書院、一九九七年(初出一九七四年)、一九九頁)とする。またレヴィ・ストロースは童話・民話・伝承も含め神話分析を行い、神話にあらゆる主体や関係性へ作用する媒介構造を見出す(『荒川幾男ほか訳『構造人類学』みすず書房、一九七二年(初出一九五八年))。川田順造は「歴史伝承は、ある社会・政治組織の中でつくられ、たえずつくりかえられる」(『無文字社会の歴史』岩波書店、二〇〇一年(初出一九七六年)、九六頁)とし、さらに同氏は口頭伝承として語り継がれる神話について、その歴史性を「過去」を、絶対時間の座標軸に基づく編年感覚の呪縛から解放して、「現在をあらしめているもの」としてとらえ「過去と現在との対話関係」として理解する(『呼びかける歴史、物語る歴史』『口頭伝承論下』平凡社、二〇〇一年(初出一九八四年)、一一八頁)。後述する桜井好朗による中世神話論の登場以前に、こうした神話と歴史の相関を捉えようとする諸研究が出揃う状況にあった。
- (148) 桜井前掲註(142)書二五九頁。
- (149) 桜井好朗『日本文化の形成』(東京大学出版会、一九八一年)、一七四頁。桜井による中世神話研究の軌跡は星優也『中世神話と歴史学』(新しい歴史学のために)二九三、二〇一八年)に詳しい。
- (150) 山本ひろ子『中世神話』(岩波書店、一九九八年)、斎藤英喜『読み替えられた日本神話』(講談社、二〇〇六年)、斎藤英喜編『神話・伝承学への招待』(思文閣出版、二〇一五年)などを参照。
- (151) 拙稿「古墳の在地領主と本拠神話」(『日本宗教文化史研究』五七、二〇一五年)。
- (152) 拙稿「神輿渡御と中世武士本拠」(『西郊民俗』二七〇、二〇一五年)、同「安芸国小早川氏の迎講と本拠形成」(『民俗芸能研究』七七、二〇一五年)。
- (153) 「本拠神話」の言説空間においては、自己のルーツを渡来系氏族や古代神話に登場する氏族に求める武士の事例もあり、その圏域は本論で設定する「広義の本拠」を超越して無際限に拡散し得るものと考えている。
- (154) 拙稿「鬼来迎源流考」(『藝能史研究』二五〇、二〇一五年二月掲載予定)。
- (155) 近年、民俗学の伝承研究において、伝承の変遷を主題としつつも、「地域社会は伝承によって維持されてきた(いる)」(加藤秀雄「伝承と自治の再生に向けて」同『伝承と現代』勉誠社、二〇一三年(初出一〇一七年)二八四頁)と、伝承が

「自治」（地域と生活の自律性）を担保する存在と位置づけられる。現代での変遷・変化そのものに重きを置く現在の民俗学の潮流に対し、過去の「歴史」を把握しようとする文献史学の立場は異なるが、傾聴すべき見解であろう。神話、
がどのように地域社会を維持するのに機能したか、今後の重要課題である。

156 小山靖憲『熊野古道』（岩波書店、二〇〇〇年、七一・七二頁）、根井浄『観音浄土に船出した人びと』（吉川弘文館、二〇〇八年、一四八～一五一頁）。

157 上川通夫「中世民衆思想の探求」（同『民衆仏教の形成と中世日本』思文閣出版、二〇二五年（初出二〇二四年））。

〔付記〕

本稿はJSPS科研費24K04220「水利資料群の研究資源化による中世～現代荘園地域の社会構造研究」（研究代表者・渡邊浩貴）の研究成果の一部である。

